

大湯木彫人形



令和 3 年 2 月

例 言

- 1 本書は令和 2 年度企画展「大湯木彫人形」を実施するために収集した資料をもとに、鹿角郡大湯村(町)で行われた木彫講習会の経緯と鹿角市郡に残された作品をまとめたものである。
- 2 企画展「大湯木彫人形」は令和 2(2020)年 12 月 15 日から令和 3 年 1 月 31 日まで実施した。
- 3 企画展の開催、本書をまとめるにあたり下記の方々より協力を得た。お名前・機関名を記し、感謝を申し上げます。

なお、文章中に出てくる個人名・機関名については敬称を省略した。

個人 浅井沓二、花海道雄、花海邦子、藤井虎雄(伊豆大島藤井工房)
稲垣康弘、加藤隆子(秋田市立赤レンガ郷土館勝平得之記念館)
高橋正(秋田県立博物館)、丸谷仁美(秋田県立博物館)
安田隼人(小坂町立総合博物館郷土館)、伊藤雄太(松本市立博物館)
榎本剛治(北秋田市教育委員会)、細田昌史(北秋田市教育委員会)

機関 鹿角市教育委員会、秋田県立博物館、秋田県立図書館
小坂町教育委員会、秋田市立赤れんが郷土館勝平得之記念館
松本市立博物館、鹿角市立十和田図書館、秋田魁新報社

- 4 原稿執筆、木彫人形等の撮影・採寸は藤井安正、文書校正・製本は安保牧子、須合正子が担当した。
- 5 本文中に出てくる書籍名については『・・』で、論文名・新聞見出しは「・・」で括った。また引用文・転載文は**太文字**で示した。
なお、末尾に記載した参考文献等については従来どおりの表記に従った。
また、新聞記事を資料として使用しているが、発行者・新聞名・発行日の不明なものについてはその旨を記載した。
- 6 写真・図版の縮尺は任意である。また、図版・表等の作成にあたり収集資料をもとに加筆・改変したものもある。
- 7 写真や図面などは所蔵者の許可を得て掲載した。所蔵者や提供者名を写真等の右下に記載した。
また、浅井小魚の日記、花海清人の日記については所有者の許可を得て掲載した。
なお、日記の中の■は判読できなかった文字である。
- 8 本文や引用した文章に不適切な用語が含まれているが、当時の状況を正確に記述するためのものであり、差別の無い社会を築いていくための資料とするものである。
- 9 加藤隆子より勝平得之に関する資料を提供していただいた。
- 10 秋田県立図書館に新聞の発行者・新聞名・発行日などの調査をお願いした。

目 次

はじめに	1
1 山本鼎と「農民美術運動」	1
1) 山本鼎	
2) 農民美術運動とは	
3) 全国に広がる農民美術運動	
2 木村五郎と講習会・組合発足	4
1) 講師 木村五郎	
2) 大湯村の木彫講習会	
ア 講習会の目的	
イ 講習会の開催と組合の発足	
a 『鹿角時報』・『秋田魁新報』から	
b 浅井小魚の日記	
c 花海清人の日記	
3) 評価、販売と拡大	
ア 評価	
イ 販売と拡大	
4) 木彫人形の作者たち	
ア 浅井末吉(小魚)	
イ 花海清人	
ウ 高瀬善治	
エ 長谷川精一	
オ 勝平得之	
3 組合の分裂	31
4 木彫人形の廃絶	32
5 勝平のサインのある木彫人形について	34
6 秋田県立博物館所蔵の木彫人形について	39
まとめ	41

写真図版

木彫人形観察表

注釈

参考文献

奥付

大湯木彫人形

鹿角市歴史民俗資料館

はじめに

市民の記憶から忘れ去られようとしているものに「大湯木彫人形」がある。

これは、昭和 3(1928)年から同 13(1938)年頃までの短い期間に鹿角郡大湯村(町)の成年達が製作し、十和田湖や大湯温泉の土産品として販売したものである。

一般的に地方で作られた玩具を「郷土玩具」と呼んでいるが、それはその土地の特産の材料を使い、その土地の風俗や伝説等に基づいて製作されたものを言う。

しかし、この大湯木彫人形は大湯地区に住む人達の姿をモチーフにしているが、自然発生したものではなく、山本鼎(文献 1)が提唱した「農民美術運動」(文献 2)と農民救済の政策の中から生まれた玩具である。

これまで、大湯木彫人形を取り上げ・記録したのは郷土史家であった斉藤長八(故人)だけである。彼の記録は『上津野No.22』(文献 3)に収録されているが、どのような事情があったのか貴重な記事や資料が欠落していた。

本書を執筆するにあたり、これまで活字として公表されることがなかった花海清人の日記(以下『花海日記』と言う。文献 4~11)をご親族の許可を得て公表することが出来た。これにより、これまで知られていなかった経緯等を明らかにすることができた。

1 山本鼎と「農民美術運動」

1) 山本鼎

山本鼎(以下「山本」と言う)は、明治 15(1882)年に現在の愛知県岡崎市に生まれ、版画家・洋画家・教育者として活動した。同 35(1902)年に東京美術学校(戦後、東京芸術大学に包括された)西洋画科予科に入学。在学中に与謝野鉄幹主宰の『明星』に作品を発表し、一躍注目された。ヨーロッパに留学し、その帰途ロシアで農村工芸品展示所を見学したことがきっかけとなり、帰国後、農民美術や自由画運動を提唱・実践した(文献 1)。

大正 10(1921)年、自由学園創立と同時に美術部教授に就任した。翌年に「春陽会」の設立に参加、以後同会展覧会に数多くの作品を出展した。昭和 10(1935)年、帝国美術院の改組により参与に推挙されたことから春陽会を退会したが、同 18(1943)年に復会している。

友人として石井伯亭(注 1)、島崎藤村、北原白秋(白秋の妹が鼎の妻)らがおおり、白秋が亡くなったときに葬儀委員長を務めている。昭和 21(1946)年に腸捻転が原因で死去した。

長野県上田市に「山本鼎記念館」があったが平成 26(2014)年 10 月に閉館。現在は上田市立美術館が引き継ぎ、山本の作品や業績を公開展示している。

2) 農民美術運動とは

山本が提唱したのが「農民美術運動」である。大正 8(1919)年に『日本農民美術建業の趣意書』(文献 12)を地元の金井正と執筆した。その趣意を

要するに、吾々の企望は、従来空費され、若くは無味に費やされつゝあつた農閑を充すに簡単な楽しみ多い創造的労働を以てせしめ、日本是名国の農民諸君の手から産業美術の一大種族を引き出さうといふものであります。

と述べている。

この運動は農民に物づくりの技術とその喜びを与え、それを産業にまで発展させようとしたもので農村における工芸振興運動であり、現在の「地域活性化事業」とも言える。

さらに、この運動は農民の増収を図り、特産物の創出、都市への農民流出防止と失業対策を目的としていたとも言われており、当時の農村改革の気運の中で行われた。

山本・金井は趣意書発表後、村の青年会と婦人会の幹部を集め説明会を開き、運動への参加者を募った。大正 8 年 12 月 5 日、長野県小県郡神川村(現在の上田市)の小学校を借りて「農民美術練習所」を開所した。これには男女 8 名が参加し、男性は木彫を、女性は刺繍の練習を行った。この時に作った木彫の人形を山本は「木片(こっば)人形」と呼んだ。

翌 9(1920)年 4 月 11 日・12 日に神川村で展覧会を開催し、同年 5 月末に東京日本橋の三越呉服店で展示即売会(文献 12)を開催し好評を得た。この即売会にはのちに「羅須地人協会」を結成した宮澤賢治、農商務省書記官や同省副業課職員が視察に訪れている。

この即売会で作品のほとんどが売れ、副業として成立することを確信した山本は大正 12(1923)年に「日本農民美術研究所(農民美術学校)」を設立し、本格的に講習を開始した。

また、三越呉服店の展示即売会を視察に来た農商務省職員の目に留まったことから、大正末期に国の農業副業対策の事業に採択された。これによって長野県内を中心に行っていた活動が全国各地に広がり、山梨・岐阜・京都・秋田県等に「農民美術生産組合」が次々に誕生し、特産品(土産品)が作られていった。

山本鼎記念館閉館特別展(文献 13)の図録集によると農民美術のデザインの変遷を第 1 期～第 4 期に分類している。第 1 期(創業期)：ヨーロッパ、特にロシアで作られていた工芸品のデザインを取り入れ、日本的にアレンジしたもので、木片人形はロシアの人形を手本にしたものであった。第 2 期(研究所時代)：大正 11(1922)年に日本農民美術研究所が設立され、本格的に製作が始まったころのもので、彩色を施した製品、風俗を表現した木片人形が作られた。第 3 期(日本農美生産組合、地方講習会時代)：大正 13(1924)年頃から全国各地で講習会が行われ、研究所の修了生により農民美術生産組合連合会が組織された。地域の土産品を作るため、郷土色が強く表現されている。大湯木彫人形はこの時代のもので PL13-2(牛追い)、PL13-3(ボッチ人形)は山本鼎の作品と非常によく似ている。第 4 期：市場の要求と連動した商品が作られ始め、当時の日本人のあこがれていた舶来品や西欧風のデザインが取り入れられるようになった。

しかし、民藝運動の創始者と言われる柳宗悦(民藝運動を起した思想家、宗教哲学者)は、この運動が西洋文化やロシア文化を模倣したものであり、日本の伝統工芸の歴史から外れたものと批判的であった(文献 1)。

3) 全国に広がる農民美術運動

この農民美術運動は、大正 15(1926)年以降から農商務省の補助金を得たことから各地に農民美術生産組合(以下「農美組合」という)が組織された。各地で講習会が開催され、製品として毛織物、白樺細工、竹細工等があったが、木彫人形が多く、組合で製作された。

主な農美生産組合の所在地と製品

- ① 秋田県鹿角市(木彫り人形)
- ② 福島県会津若松市(木彫り人形)
- ③ 栃木県今市市(木工細工)
- ④ 栃木県日光市(木工細工)
- ⑤ 千葉県香取市(浮き彫り古代鞘小刀)
- ⑥ 千葉県君津市(木彫りギニョール人形)
- ⑦ 千葉県勝浦市(大量踊風俗人形)
- ⑧ 千葉県鴨川市(木彫飾縁)
- ⑨ 群馬県沼田市(果物皿)
- ⑩ 埼玉県熊谷市(果物皿・張子面)
- ⑪ 東京都八王子市(額縁・置更紗)
- ⑫ 東京都青梅市(煙草盆ほか)
- ⑬ 東京都大島町(大島アノコ人形)
- ⑭ 神奈川県川崎市(風俗人形)
- ⑮ 神奈川県藤沢市(貝象嵌果物皿・盆)
- ⑯ 山梨県富士吉田市(木彫り人形)
- ⑰ 静岡県御殿場市(富士登山人形)
- ⑱ 新潟県妙高市
- ⑲ 岐阜県養老町(張子面)
- ⑳ 岐阜県東白川村(鶴飼風俗人形)

※ 市町村名は現在の名称
 ※ ()内は主な製品



※ 長野県の農美生産組合については『農民美術 児童自由画 100 年展』に詳細図がある。それには 63 ヶ所の組合が掲載されている。
 また、同書には近畿・中国・四国・九州地方の組合も記載され、全国に 125 ヶ所の組合が全国に点在していた。

※ 本図は農民美術・児童自由画 100 周年記念事業実行委員会が刊行した『農民美術児童自由画 100 年展』、宮川泰夫「農美運動と民芸運動：風土文化の深化と産業地域の改革」に収録されている図・文章をもとに本館が作成した。

第 1 図 東日本の農業美術組合の分布

宮川泰夫の「農美運動と民芸運動 風土文化の深化と産業地域の改革」(文献 14)の中に日本農民美術研究所編『昭和八年 財団法人日本美術研究所概要』が収録されている。この中に「類型別・農民美術指導組合の全国展開(1932=昭和 7 年度末)」がある。この図をもとに第 1 図(西日本を除く)を作成した。この図から農美組合は中部地方・関東地方に集中し、北海道・東北地方では秋田県大湯村と福島県会津若松市のみであったことが分かる。

代表的な農美組合として長野県神川村の日本農美生産組合(作品は木彫風俗人形・小木工)、同別所村ホームスパン組合(羊毛毛織服他)、上高井村(白樺樹皮細工・竹細工)、東京府大島(木彫人形:大島アンコ人形、注 2)等があり、文献 14 によると昭和 15(1940)年頃には 200 余りの農美組合が存在していた。

2 木村五郎と講習会・組合発足

1) 講師 木村五郎

明治 32(1899)年、東京市神田区(現在の東京都千代田区神田)に生まれる。昭和 19(1944)年 8 月 1 日没。大正 4(1915)年に東京高工附属徒弟学校を卒業し、山本端雲に付いて木彫りを習う。その後、石井鶴三を慕って指導を受け、同氏の推薦で同 8 年日本美術院研究会員となり、翌年の院展ではじめて入選した。大正 13 年 3 月、石井鶴三に山本主宰の「日本農民美術研究所」で仕事をしたいという旨の手紙を出し、その後、山本と行動を共にしている(文献 15)。

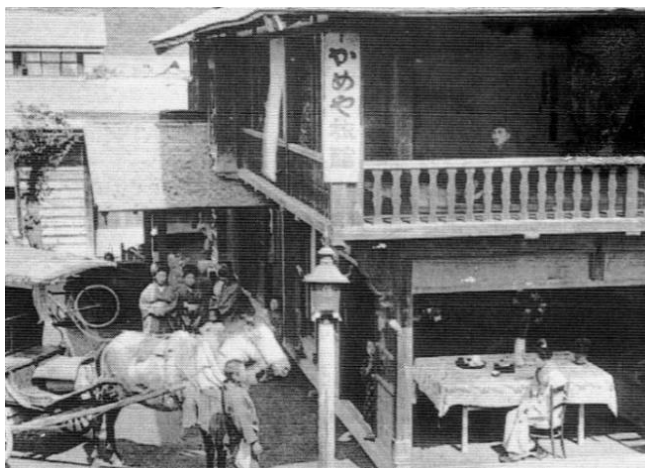
同 15 年、福島県土湯温泉に滞在し『木彫の技法』を執筆し、その後、京都府宇治町や長野県川路町で木彫りの講師を務めている。大湯村(町)には昭和 3 年 8 月 1 日~22 日、同 5(1930)年 2 月 5 日~3 月 5 日の二度に渡って木彫講習会の講師として来村(町)している。

その時の投宿先は、大湯村(町)下ノ湯の旅館「かめや」(PL1)であった。

その後も全国各地から講師として招かれ、木彫りの指導を行った。

昭和 8(1933)年 4 月 1 日の『秋田魁新報』(文献 16)に、秋田市中通にあった県物産館で開催された木彫展の記事(PL2)が掲載されている。

この展示会に木村は作品 33 点を出品した。



『鹿角市史 第四卷(下)』より

PL1 木村五郎の宿舎となった旅館「かめや」



(文献 16 より)

PL2 展示の準備をする木村五郎

作品「街へ」の1点以外はすべて鹿角風俗を題材（PL3、第2図、文献16）にしたもので、第19回院展に出品し、好評を得たものであった。

展示会前日、取材をうけた木村は、

私は伊豆大島風俗と秋田風俗を研究しております。大島風俗は南国としての味があり、秋田風俗は北国としての味がありどちらもおもしろいと思ひます。

秋田風俗は一昨年から取扱い東京における展覧会にも二つ三つ発表していましたがこんなに沢山発表するのは初めてです。

と語り、最も関心のある土地として伊豆大島（現 東京都大島町）と秋田をあげている。

PL3は秋田魁新報に掲載された「陸中鹿角風俗」人形である。この人形の下絵となったと思われる木村五郎のデッサン画（第2図）が浅井家に残されている。

2) 大湯村の木彫講習会

ア 講習会の目的

明治30(1897)年に和井内貞行が十和田湖鉛山に「旅館 観湖楼」を建設し、秋田県と青森県の新聞に広告を出し十和田湖とともに大々的に宣伝した。これによって観光客が増加し、秋田県側の観光ルートの途中にあった大湯温泉の宿泊客も増えた。

この他に観光客が増えた要因として、大正12年に尾去沢鉦山や小真木鉦山等の整備と拡大を図り、十和田湖や大湯温泉等への観光客誘致を目的に敷設された私鉄秋田鉄道(大館～陸中花輪間・注3)の開通があった。それに併せて毛馬内駅(現在の十和田南駅)から十和田湖への道路網が整備され、さらに昭和3年に十和田湖が特別名勝天然記念物に指定されたことが観光客の増加を促した。



(写真提供：藤井虎雄氏)

PL3 木村五郎作の「陸中鹿角風俗」人形



(資料提供：浅井沅二)

第2図 木村五郎のデッサン画

また、昭和 6(1931)年には鉄道省花輪線(好摩～陸中花輪間)が開通。同 9 年(1934)に鉄道省が秋田鉄道を買収し、花輪線(好摩～大館間)が一本の路線として繋がったことから大湯温泉や路線近郊の温泉がさらに発展した。

昭和 3 年の木彫講習会の目的は、増加する観光客に対して不足していた土産品作りであり、これ以後の十和田湖の観光地化とそれに伴う観光客のさらなる増加を見越して行われたものであった。同年 4 月 10 日の『鹿角時報』(文献 17)の「大湯通信」には「十和田往還者の土産を作り出すこと」という記事が掲載されている。

この頃、大湯温泉の発展と十和田湖の観光化に取り組んだ人物がいた。諏訪富多(注 4)である。諏訪は大正 10(1921)年に「大湯ホテル」を開業し、同年鳴子こけしの作者小松五平を招き入れ、特産品として「大湯こけし」を作らせている。

さらに、昭和 3 年には陶芸家の雲山(名古屋生まれ)を招聘し、大湯村川原の湯に窯を築き「大湯焼」を作らせている。同年 8 月 30 日の『鹿角時報』(文献 18)の記事の中に木彫講習会の閉校式出席者として大湯村長谷地政民と共に「諏訪文学士」の名があることから、この講習会にも少なからず関わっていたものと思われる。

イ 講習会の開催と組合の発足

昭和 3 年の講習会は、鹿角郡や秋田県内でも注目を集め『鹿角時報』や『秋田魁新報』が記事として取り上げている。また、講習会に参加した浅井末吉(俳号は月太・小魚)も日記(以下『浅井日記』と言う。文献 19 に収録)に講習会期間中の様子を記録している。

さらに大湯村の役場職員(事務を担当。自らも木彫人形を製作した)であった花海清人(以下「花海」と言う)が昭和 3 年の講習会終了時から昭和 5 年の講習会終了までの様子を日記(以下『花海日記』と言う)として残しており、それから経緯等を読み取ることが出来る。

『鹿角時報』・『秋田魁新報』の記事、『浅井日記』については、所蔵者の浅井沓二、『童心の彫刻家 木村五郎資料集 I』(文献 19)の執筆者である山口畑一の許可を得られたので再録し、昭和 3 年の講習会終了から昭和 5 (1930) 年 11 月 10 日までの活動については『花海日記』から講習会や農美組合の活動に係る部分を抜粋して紹介する。

a 『鹿角時報』・『秋田魁新報』から

○『鹿角時報』 昭和三年二月十日 (文献 20)

昭和 3 年 2 月 10 日に大湯村農会役員会が開催され、諮問事業として「副業奨励上に対する意見」が提出されている。

『花海日記』から秋田県副業課の補助事業として行う計画であったことが分かったが、どのような過程で大湯村が選定されたのかは不明である。

事業の主担当者として大湯村役場の工藤仙一があたり、役員会後に秋田県副業課に講師の派遣依頼を提出している。この当時工藤は役場の技師、大湯補習学校の教員であったが、昭和 30(1955)年 5 月に尾去沢町長に就任(一期)している。

○『鹿角時報』 昭和三年四月十日 (文献 17)

・ ・ 大湯通信 ・ ・

山本鼎先生を招聘して 鹿角の農民美術品を作出し 十和田往還者の土産にしやうといふこともあります。

- 『秋田魁新報』 昭和三年五月二日 (文献 21)

十和田土産 木彫と石膏細工

日本農民美術研究所の指導を受けて

十和田湖に遊覧する人々に適当な土産品とするものなく、僅に青森縣で産する「にきよう細工」のみが気を吐いて居るを遺憾として居たが、去月二十六日、増田農林主事は鹿角郡大湯村役場に至り、村当局と談合し縣の計画を示し村では大賛成をして六月上旬着手する事となつて居る。これは十和田湖岸にて産する楓葉樹の木彫細工、挽■細工、樺皮製品、十和田の石膏細工を主として、長野縣に本部を有する日本農民美術研究所の指導の下に風俗・傳説・風光等を参酌して製し、販賣、製造共に組合組織とするもので差当つて村の経費としては六百貳拾三圓を要し、縣では相当額を補助する一方、冬期の農閑期を利用して日本美術研究所の講師を聘し、青年子女に製品指導と共に農民美術の講義をなすことになつて居る。

- 『秋田魁新報』 昭和三年六月二一日 (文献 22)

木彫り人形

講習会を開く 大湯村にて

縣農務課副業係では、木彫秋田風俗人形を土産品として生産せしむることになり、日本農民美術研究所の諒解援助を得て先づこれが第一着手をと鹿角郡大湯村に縣費補助を與へ、来る七月二十日より八月九日迄二十一日間講習會を開催することになった。種類は秋田を象徴すべき風俗四種を選び、研究所の評議員たる平福百穂氏にこれが意匠を依頼し、講師は研究所より派遣を乞ふことになつてゐるが、大湯村では追々十和田と聯合して土産品組合を組織する意向で、この成績に依り縣では田澤、男鹿その他の名勝地にこれを奨励する豫定である。

- 『鹿角時報』 昭和三年六月二十五日 (文献 23)

愈々確定した大湯村の風俗人形木彫講習

講師は農民美術研究部より招聘して 一般講習生の申込を望む

十和田湖が日本一否世界にほこるべき名声を博しつつあるが、これを觀賞する人達に何かしら此の地方を紹介するやうないはゆるローカルカラーを多分にとり入れた土産物を製作したならば、その仕事によつて一つの地方生産事業たらしむるのみならず、又、十和田往還者をよろこばしめ、且つ記憶に深く印象づけるためにもいゝであらうと云ふことに着想したのは、今、大湯補習学校に教鞭を採られる工藤仙一君であつたが、此事は案外周囲の人達の注目するところとなつたので、こゝに県の副業課にその意思を陳じたる結果、大湯村、土産生産組合の組織を見ることとなり、いよいよ左の計画によって、郷土色をとり入れた秋田風俗人形木彫講習會を開催することに確定を見た。

講習生は敢て大湯村の在住者に限らず広く希望者を歓迎すると云ふことであるから、これの趣旨に共鳴される人はどしどし申込みあり度いと、

- 一、主催、大湯村土俗生産組合
- 二、講習科目、木彫、秋田風俗人形
- 三、講習会場、大湯村役場（注5）
- 四、意匠者、平福百穂氏（注6）
- 五、講師、日本農民美術研究所より招聘
- 六、講習料、金五円
- 七、期日、七月二十日より八月九日迄三週間 以上。

○『秋田魁新報』 昭和三年七月二五日（文献24）

十和田土産の製作講習会

十和田土産の製作講習会は来る八月一日より二十日間、大湯村に於て開催することになり、講師は日本農民美術研究所に交渉中だったが、今回同研究所森（「木村」の誤植）五郎氏と決定せる旨通知あり。同氏には本二十五日来秋して秋田風俗研究の上サンプルを作製し直に製作指導に従事すると。

○『鹿角時報』 昭和三年八月三十日（文献18）

大湯土俗製産組合 木ぼり講習会終る

やがて鹿角の名物とならん

かねて大湯小学校に於て講習会開催中の土俗製作組合木彫講習会は去る二十二日午前十時よりこれが終了式を挙行、増田農林主事以下、講師木村五郎氏、谷地村長、諏訪忍両校長、高濱技師、諏訪文学士其他来賓の参列あつて左の講習生に終了証書を授与し将来組合発展上につき希望を述べ、木村講師の感想談あり。式を終了当日は、製作品を陳列して一般に展覽せしめたが、木村講師のサンプルは牛方、子供の冬姿、女の角巻姿、農業婦人の夏ゴザ姿の四種である。

◇修了生 浅井末吉、黒澤猪太郎、工藤要四郎、上野芳雄、上田貞三
高瀬善治、及川鉄太郎、千葉悦三、石川四郎、青山實、勝平徳治

○『秋田魁新報』 昭和三年九月二九日（文献25）

十和田のみやげ

大湯彫人形 大湯町制を機会に一斉に宣伝発売

本県には十和田湖の如き世界的景勝地を筆頭に田澤、抱返りや大湯温泉等清遊保養地が沢山あるが、これらに清遊する遊覧客に対する適当な土産がなく非常に遺憾とされていたが、縣では本年先づ十和田湖の関門である大湯村に組合を組織せしめ、日本農民美術協会から講師を聘して土産講習会を開催し、本県特有の風俗人形の木彫を作り非常に好成績を収めたので、今回大湯村が町制施行に際して一斉にこれが宣伝販売をなすべく準備中であるが、木彫は「十和田みやげ大湯彫人形」と銘打つことになり、木版下字は県の請えを容れ本社安藤主筆が麗筆をふるわれたが、この木彫は価格も低廉で美麗

な箱入れとなしたもので、遊覧客から大歓迎されるだろう。

○『鹿角時報』 昭和三年十一月一日 (文献 26)

木彫秋田風俗人形 農民美術

十和田土産として好評。組合を組織して製作工場も完成す。一組合員

今夏、設立された私共大湯農民美術生産組合、最初の試みである木彫秋田風俗人形が愈々世に出ることになりました。日本農民美術研究所同人木村五郎先生ご指導の下に長い間の考察と努力を経た労作であります。

それは、神秘境十和田湖を中心とせる遊客を主とし、普く世の愛好者を対象として生れた郷土色鼓吹の土産品であると同時に、永い冬を有つ私共が年々の大半を漫然徒消し来つた私共自身を仕事によつて意義づけて行き度いと希を総合した此組合の理想実現の第一歩を象づけたものであります。

古く保たれ来つた農村生活の素朴と純情と土の香の基調の上に、新らしい手法を以て立つ作品それ自体の質の深さと、多量生産によつて維持さるゝ組合それ自体の実際的立場との二つの条件は、私共の仕事をより困難なものとするのでありますが、創業に當つての諸種の障礙を凌いで組合の基礎確立した今日、最初の踏出しに於てにも、其作品が東都各方面の芸術専門家によつて保証され、且つ世の大方の好評を博しつゝあるといふことは、遼遠な前途を有つ私共にとつて、勇氣と自信とを更にして、高い目標に直面し得べき信念を与えられたことであります。

厳格なる木村先生不斷の御指導は常に作品向上の指針であり、私共は自ら知る信念によつて自らの理想完成への精進に熱と力とを打ち込むのみであります。

現在、創業間も無く組合員数の少ないことから、愛好者各位の全部の需めに応じ兼ねる状態ではありますが、逐年講習会を催すことによつて製作者の養成につとめる一方、本月二十三日を以て落成した組合共同アトリエに於ける共同製作と自由研究により、優作品多数製産所期の計画確実なものとなりました。

来る十一月一日、当大湯村町制施行祝賀会に際しては組合第二回展覧会を開催して広く一般の観賞に供しその御覽評を得度い考へであります。

秋田県鹿角郡大湯農民美術生産組合

組合長 千葉 茂

副組合長 花海 清人

理事 玉井 三郎

同 千葉 悦三

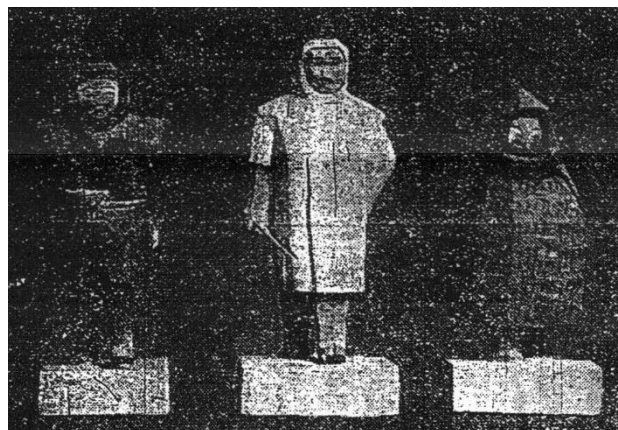
同 瀬川 善治 現在組合員 十五名

○『秋田魁新報』 昭和三年十一月一日 (文献 27)

大湯土産土俗人形

今日から町制を敷かるゝ鹿角郡大湯温泉にては過日も紹介した如く温泉土

産として朴で製する農民美術土俗人形を家内工業として製作し、見本として五十個を東京へ送り審査をして貰っていた所不合格四ヶ他は全部優良品として三十日帰されたので今日一般に頒布される由にて、役場や青年団で大いに力を入れて居れば今後は一名産とならう
(PL4 が記事に添付された写真)。



PL4 『秋田魁新報』に紹介された人形

とある。

この『鹿角時報』や『秋田魁新報』の新聞記事から、

- ① 大湯村での講習会は、秋田県副業課の支援を受けて開催された
- ② 講師として農民美術運動の提唱者である山本鼎(実際には講師として木村五郎が派遣された)を招聘し、十和田湖に訪れた観光客を対象に土産品を作り出すこと
- ③ 土産品は木彫の人形、挽(物)細工、石膏細工の三種とすること
- ③ 木彫人形が好評であれば、田沢湖や男鹿でも同様の事業を行う計画であったこと
- ③ 講習会を開催するため大湯土俗生産組合を発足させ、講習生を募ったこと
- ④ 講習会終了後、講習生らが大湯農民美術生産組合を設立し、製作拠点としてアトリエを設けたこと

等、大湯村や講習会に参加した成年達の大まかな動きを知ることができる。

b 浅井小魚の日記

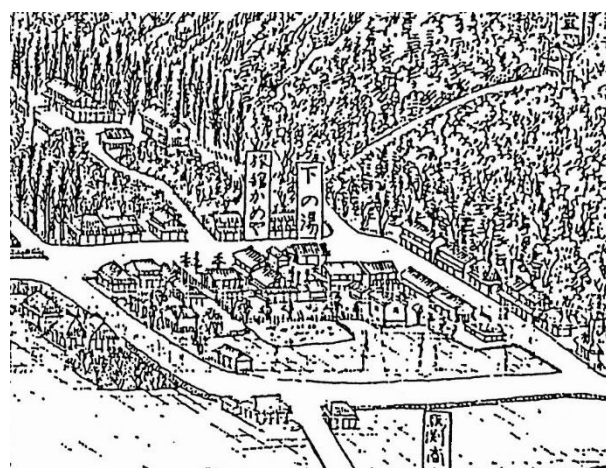
『浅井日記』は『童心の彫刻家 木村五郎資料集 I』(文献 19)に収録されている。この日記は浅井沅二から農民美術研究家山口畑一に提供されたものであるが、浅井沅二と山口畑一から掲載の許可を得たので掲載する。

昭和三年

七月二一日 一時過ぎ山本鼎氏より手紙が来た。講師の宿をカメヤと決定。二階の広間を一日二円五十銭とすることで話がまとまる。

七月二六日 木村氏来着の筈、着替えて迎えに立つ。カメヤ(第3図)より電話あり、離れに伺って菊地主事と木村氏に会う。

七月二七日 四人連れで坂上苗園に



(昭和5年『大湯町真景図』より)

第3図 旅館「カメヤ」の位置

行き、草取り婦らの動く姿を見る。講師は菰ゴザを手に取って調べた。

七月二十八日 湯に入った後「木彫の技法」を読む。不明な点を著者にただしたところ「誠に人間より先ず初めなさい」との言葉をいただいた。

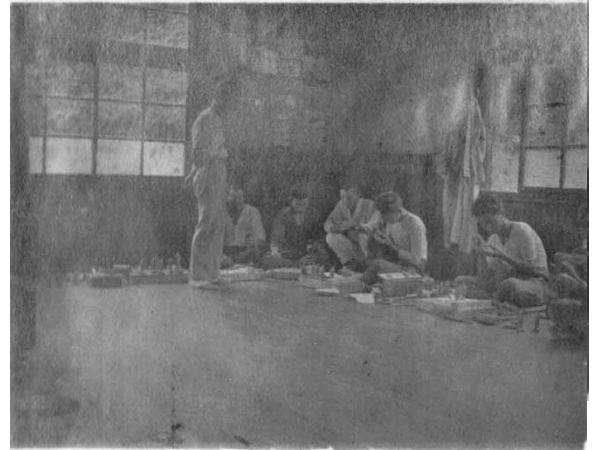
七月二十九日 昼食後お寺のかあさんが縫ってくれた「秋田三角頭巾」と「マント」を持って木村先生のところに行った。「木彫の技法」大方読了した。

七月三十日 カメヤに行くと木村先生が「農婦」の「コモ着姿」を彫っていた。

七月三十一日 木村講師の彩色の終りかかった「コモ着姿」は素朴過ぎる程無技巧である。吾人には余りにも曲がなさ過ぎる様に感じられるが、これは講師の大成の偉大さであるかも知れない。

八月 一日 カメヤの湯に入った後講師を訪ねると先生は美術院に出す葉書をお書きになっていられた。その内容は鳩（実物大一）少女の首（鑄造一）釈迦立像（鑄造一）であること示された。

八月 二日 講生いよいよ十一名に減る（PL5）。講師より樹質についての小話があった。



(写真提供:藤井虎雄氏)

PL5 昭和3年の講習会風景

- 八月 三日 カメヤの湯に入った後、木村先生を訪ねる。先生は「婦人浴槽の図」を先日に続き興味つくるところなき様に描かれている。
先生は「裂き織」を好まれている。
- 八月 五日 カメヤに行くと先生は読書中であった。話していると東北玩具案内編集者の仙台鉄道局丹野寅之助が来て吾々の人形を見たいと言うので話しをした後、先生共々学校に行き人形を見せた。
- 八月 六日 木村先生「ユカタ着」で来宅され、「コモ人形」(八寸丈)を彫ると言って鋸を入れたり、欠き取ったりしたが、木質が悪く思わぬ欠所を出したりした。
- 八月 七日 木村先生の少壮天才なる事を米田氏と語る。
- 八月 八日 夜カメヤに行き木村先生を訪ねると「コモ着姿」の製作は大体はかどり頭の部分を作っておられた。
- 八月 九日 夜、カメヤの木村先生を訪ね水蜜桃を御馳走になった。勝平君、高瀬君も一緒に先生の仕上げ中の「コモ姿」を膳にしながら話し合った。先生は製作の像を手にしながらこんなに自分の製作が捗った事はないと言われた。朴の木質の悪い点を気の毒に思った。早く院展出品となるようお祈りした。

八月十一日 木村先生を十和田湖に優待することについて工藤君と話し合う。十一時頃宿を出て十和田湖に行くことになる(PL6)。

八月十三日 夜カメヤに木村先生を訪ねると、どんぶりの中に鮎とイモリを入れて頬りにのぞきこみ写生をしておられた。

イモリは初めて見たとのことでした。

八月十四日 夕食後、栗の木より借りた「牛方腹当」を木村先生のところに持って行く。与一の軒先で甚九踊があるので木村先生に見てもらうため先生に電話した。中通の女十二人に少しばかりの菓子を買女十二人に少しばかりの菓子を買って踊ってもらう。木村先生の興に供することができた。

八月十五日 先生最後の一作「牛追い姿」を作る。夜、木村先生を訪ねる。

八月十六日 木村講師のサンプル(PL7)の作品は今日中に彩色して完成するようと言われる。カメヤに行くと自分が木村先生に書いてもらうため渡した画仙紙に先生が書いておられ反古にしたことを恐縮



左から木村五郎・高瀬善治・勝平徳治
(写真提供:秋田市立赤レンガ郷土館)

PL6 十和田湖観光の記念写真

がっていられた。

八月十七日 講習会会場退出後、花海君と三郎君と三人で木村先生を訪問した。花海君は木村講師を不老倉に案内するための訪問である。先生は写生にでも出かけられたのか不在でした。



(写真提供:藤井虎雄氏)

PL7 木村五郎が作成したサンプル

八月十八日 木村先生もおられて酒杯はじまる。先生は余り多く飲まなかった。

八月十九日 夜カメヤに木村先生を訪ねると勝平君の室でオバコ節を習って居た。工藤君も来わせ皆でやり出したがすぐものになりそうになし、なかなか難しい状況だった。

八月二十日 講師は各自の作品の中から自分用のサンプルを選定してくれた。

八月二一日 木村先生は今宵も「オバコ節」を練習された。

八月二二日 山形鼎先生の農民美術の提唱は今日の社会運動としての農民運動に合致するものであるか否かについて木村先生にお聞きしたところ、先生は何分とも思想問題には結びつけておりません。芸術至上の立場よりする指導のものであると答えられた。

八月二三日 木村先生は午前九時に帰途の出立となる。尾去沢を見物して荒屋新町に午後四時に到着予定。工藤君の案内で先生はこの地を去ることになった。

以上が浅井の日記で、主に小魚と講師木村五郎との個人的な出来事が書かれている。

C 花海清人の日記

次に、昭和3年の講習会以降の組合の活動を抜粋して紹介する(文献4、5、7、9)。

八月二二日 農美修了式。後会員総会。夜、木村氏送別会

八月二三日 朝九時、木村氏見送り。

八月三一日 午後二時より六時迄役員会。工藤先生、千葉悦、瀬川、上野、花海。浅井氏の暴言問題、組合長採択問題、組合条文改訂、総会議案事項。

九月 八日 大湯農民美術組合総会。午後二時。出席者十一名。及川氏不参。
一、規約改訂
一、会計報告
一、会員登録
一、役員選挙

- 一、販売方法
- 一、作品の名称
- 一、材料の件
- 一、組合員責任製作数制定の可否
- 一、販売及び組合に対する歩合金並に積立金

役員選挙の結果(選挙人 拾壹名)

組合長 千葉茂 八票 副組合長 花海清人 七票

理事 瀬川善治 九票、千葉悦三 七票、玉井 五票

九月十二日 夜(中略)高木氏、工藤氏の浅井氏に対する交渉の結果を承る。浅井氏全々話にならず。工藤氏に対して見当違の誤解を持ち散々悪舌し弄せりと。瀬川氏の村長訪問の結果なり。千葉氏の意見なりを徴して明日有志会を開きて善後策を講ずることとせり。

○去る、八日の総会の決定通り当分組合長保留の形にて現状保留のまま、経過を見んとすは意見・・・村長、工藤氏、高木氏

○委員会制度として成年組結束を期し、退会を聞きて、新建設に向わんとするもの・・・千葉悦三氏、自分、瀬川氏

○組合長辞退、役員辞任・・・千葉茂氏

九月十三日 午前九時半 瀬川氏より電話あり。寺に於て会合することにせり。

参集者 伊藤住寺、上野君、瀬川君、玉井君、千葉君。

高木氏へ、村長諸先輩の意見を取り入れて当分このまま現状維持。追って、浅井氏及び工藤両氏の各々意見は違えど、夫々の慰労の法を立てること。

九月二三日 夜、七時過ぎ、玉井氏来訪。人形の件について。工藤先生、悦三氏の二人、玉井氏宅に来られ、県庁の菊池氏からの来信を示されて、種々相談あり。

○人形入れの箱・・・秋田の勝平君等の尽力で見本的に造る。

一ヶ、2.5 銭(色 ミドリ)(PL21-上)

○箱のレットル・・・一枚二厘位の見込み

○京都博覧会出品の件・・・出品交換その背景写真の件

○葉の件

○名称(箱書の)

第四の葉の件につき 第五の名称の件につき、玉井氏と協議。菊池氏より(中略)名称を(木彫 十和田湖沿道風俗 歩行人形)とあり。(説明文を僕にやれと皆で決めて来たる由。箱書の件も同様)。

京都に送るべき背景写真については、東京日日社へ高木氏より一応交渉してもらい、社で発行した十和田等八景写真の元版より

複製して、成る可くは、菊池氏の思い付きに添ひ度き希望なり。

九月二四日 午前中、昨夜の玉井氏から頼まれた「人形の説明文」をものにして、しようと思案して見たものの、概念だけはあるのだが、どうも、はっきりした文字には仲々まとまらない。

九月二五日 「人形の歌」やって見ると仲々に難物である。生中、詩の形をとらしめたのが悪かったのかもしれない。散文詩の形式にしてみたものの「土俗風物の説明も」という条件付きであるために、全々自由に主観的なものも作れないし、条件を忠実に守ることになると、ぎごちないものになる。

九月二六日 午前中にどうやら例の散文詩わばまとめあげて見た。(中略)

「牛追い」 粗布の真中程に穴あけて面、突き出した閑々たるいで立ち白樺茂る牧場をば、郭公靄ふるはしで啼く、またぎ、いで立ち、水に沿ふて下り、水に沿ふて上る、日に三里、羽立は二日、牛と牛追ふ人と歩み急がず、月も亦彼等が上に閑々と照るなり。

「農 婦」 起き伏しの山のつらなり、そは遠き北の高原、光る風、南より吹けば、此の国満月の青き木草、一せいに打ち摩く、かかるとき、旅する人よ、はからずも通りすがりに、赤き青きむらさきの布に、おもて包みてあやしくも、切なる唄唄ふよと、見ることのあらば、日除の莫屋徹しむれ立つ、草のいきれに肌しとしと濡し、胸張りて郷唄うたふはあわれ乙女と知りたまへ。

それから間もないが、出来上がった詩を持って玉井氏を訪ねた。

瀬川氏も偶然居て都合よく二人に一応読んでもらったが、これでよかろう。ということになる。

十月 一日 (前略) 今後同時にアトリエ創立の議あり。予算約四拾九円見当にて。二間四方のもの。千葉万事、会計方面を引受けて下さる由にて出来上れば実に結構なる事なれば、早速皆で其の目的の実施を計ることになるべし。

十月 三日 工藤氏を訪ねて、総会を開く準備をしようということになる。

十月 八日 (前略) 歯医者氏方から、再々電話にて会議に出席を促し来たる由なり(中略)散文詩清書の為め、時間を取り、午後四時、ようやく出かけることが出来た。

出席者 千葉茂氏、和尚氏、玉井氏、瀬川氏、上野氏、工藤先生、小生、悦三氏遅参(六時頃)

◎栞の件、箱書の件、アトリエの件、決議。

アトリエの件。

予算一全部新設にすれば約八十円也を要する見込

寄付一和尚氏・硝子五十枚(一枚十二銭として金六円也)

費用一茂氏一時立替下さること。

償還一組員、月々作品にて随意納付。

色素到着一黄、丹、岱赭、朱土（約五十銭程の品）

十月 九日（前略）瀬川氏立寄り、村長氏より「十一月一日、大湯町制施行記念」の日、県内各方面の人々に対して、人形彫刻の展覧会を開きて、御目にかけてたいから、それまでに其準備をしてほしい」との相談を受けた由を告げて、相当の準備と作業方針等を談合し、明日、寺に集りたる折、其件は決定することにして、（中略）
本日、ホテルに於て活動写真撮影したそうだが、其節、浅井氏の木彫作品もフィルムに収められ、土俗生産組合の名に於て、宣伝を目的とせる由。

十月十一日（前略）アトリエ敷地を見分に行く。奥座敷と台所と軒下の三ヶ所を吟味して、その揚句場所変更して、家の西陰がよかろうと
いってになる。（中略）今日発送した作品のうちどれ丈合格するか、牛方の中には、よさそうなものはあるが。

十月十三日 アトリエ問題に付いて、工藤氏、悦三氏、玉井氏等寄せ、最後の決定を見たり。大工が来て、材料まで取り揃える段取りとなる。瀬川氏外青年団幹部連中來宅。町制施行祝賀会の準備金募集の為、昨日は小坂鉦山行。今日は尾去沢鉦山から不老倉山まで奔走されて、其帰途。

十月十四日（前略）悦三氏より「アトリエの設計が変更されたそうだから、行ってみて下さい」と話あり。直に玉井氏方に行き、折よく居合せて大体の話をきいた。自分もしっかりと我々の考えや概念を述べて、元通り、最初の計画に立て戻って、建立することになっているのだそうである。（中略）大工、工事に着手。

十月十五日（前略）（木村五郎氏の手紙）を見せられた。

- ・浅井氏組合脱退のことに付て、また、そうした異端者の勝手な作品を排除するため「木村五郎氏指導作品」という文字を明記して正当な組合作品を世人に知らしむるように。との注意。

- ・大湯風俗の彫刻を完成し度いは思うについて、女人用のモンペ等を借用したい旨を工藤氏へ申送ったと。

- ・大湯をなつかしむ心しきり、講習中の写真をほしいと組員の手紙を望むとのこと。

- ・尚、浅井氏は組合芽生の功労者であるから、円満複会を希望すと意味のこと。等の内容であった。

十月十九日（前略）研究所からの手紙は格別の事なり。

作品四二個全部合格と見てよき旨あり。

尚 一、 作品売値

二、 卸値断

三、 製作能力 の三ヶ条に付き問合せあり。

其返信は、私に任せられた。手紙(研究所の)を預かって来た。

十月二十日 夕方、アトリエを見る。(中略)アトリエは家根、外回全部出来上り、窓だけ作ればよい。二十二日には完成の見込み。

十月二三日 アトリエ完成。茂氏が来られ、今日矢筈山まで行って、雉二羽撃って来たから、一羽進呈しようと言われる。早速、頂戴することになり、獲物をぶら下げて来て、瀬川、玉井両君羽根をむしり、私は料理を受け待った。四時頃万端の準備調ふ。一先づ帰宅して直ぐ入浴して出かけた。アトリエに着くと、最早や準備座席が出来て、すっかりお膳立が出来上り 雉からいい香が部屋の外まで流れている。参集者、大工、上野、工藤先生、玉井、瀬川、おくれて和尚氏瀬川君の子供方も加ってにぎやかに会食を語り漫談す。

十月二五日 工藤先生から、種々と秋田市行の報告あり。浅井氏のおどろくべき無茶な行動についても種々報告あり農当局の方からも注意ありたる由なり。

十月二三日 千葉茂氏、組合長就任。声明せり。

十月二十日付、木村五郎先生の書信。作品評価。

※木村五郎の評価については後記する。

十月二五日 午後一時ヨリ。アトリエ参集。落成式

参集者 1 千葉茂、2 花海、3 玉井、4 千悦、5 瀬川、6 工藤先生、7 上野、8 黒沢、9 石川、10 工藤与四郎

11 青山(上田)、12 二和尚氏、13 村長、14 千葉盛

高木 諏訪 田中 不在

・牛追い七十、農婦七十、雪娘六十、雪童、六十

地場うり 値段不問の賛否

東京行 東京行は地場売値段に対する二割五分掛けのことに決す

・地場売 七十銭 六十銭

十月二九日 勝平君からの手紙や県の菊地氏からの来信(栞の様式変更)写真(人形四種の)等と思た。東京から返送した作品は、工藤先生からアトリエに運んだ。不老倉事務所と誠治さん方へ祝賀会招待状を出す。勝平君へも書信する考えである。

十月三十日 (前略)安藤和風氏、レットル揮毫、本日到着の見込。

本日、魁社の田口氏、アトリエ訪問され農婦、マント、各一ケづつ買い帰らる。金老円三十銭。

十月三一日 午後一時半、アトリエ行。(中略)それから学校へ行って、先に工藤先生や学校の先生方の手伝で半分だけ陳列した。会場をすっ

かり模様替えして、全部の陳列を終わり、借物の菊の懸崖鉢も飾りなどする。

十一月一日 天気良くて寒さ厳し、雪ちらほらと降る。

大湯町町制施行祝賀会
〃 農美組合展覽即売会
学校へ行くと大変人気が上って陳列場は人が一杯であった。

午後二時、陳列場始末
(総売上金拾四円ほどあり)盛況のうちに終わる(第4図)。

十二月十八日 作品荷造り 発送

県庁農務課 増田千代橘殿へ。
秋田市鉄砲町 勝平徳治君へ
空函四十ケ 栗八十枚(三種)
発送作品 合計百四十五個(箱二個入)。
第一号箱 農婦弍〇ケ、牛追弍〇ケ、マント参〇ケ、
毛布参〇ケ、空函四〇ケ

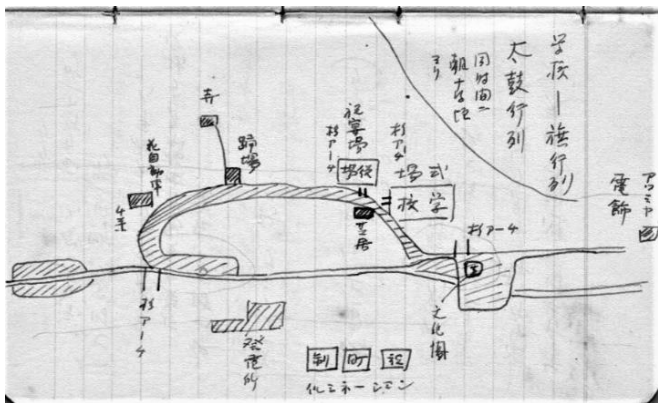
第二号箱 牛追三ケ、農婦五ケ、マント十五ケ、毛布二二ケ
一二月一九日 三時頃、せ川氏と二人で草城へ、私の道具をとり猪太郎の家に行く。(中略)猪太郎君の家で二十分ばかり休んだ。家内中の人が見なががりて製作しているので、仲々上手に出来ている。

一ヶ月二百五十位は作りますとの話。浅井氏は近頃一日六、七ヶ。平均の行程の由。近いうちに、秋田市で展覧会をやるとかで馬力をかけているようだ。

今日、アトリエで寅吉氏の話によると、例の成田君やもう一人の誰かが、弟子入りしているらしい。

昭和五年

一月 七日 四五日前、浅井氏の子供がこれを配布して行ったそうで、あとで所々で聞いてみると大湯下各戸へ配ったらしい。年始挨拶状(第5図)



(花海清人の日記から)

第4図 大湯町町制祝会会場配置図



(花海清人の日記から)

第5図 小魚が配布した賀状

であろう。人形制作の方は家族総掛りで出精して居る由。

- 二月 五日 木村五郎先生来湯。夜、千葉茂、工藤仙一各氏と僕も招ぜられて参向。軽■を配んで交歓せり。各氏と僕とは凡そ十ヶ月振りの面接なり。
- 二月 六日 木村五郎先生を案内して、部落方面、題材蒐集。朝十一時頃より、夕方に至るまで。草木方面より本町へ。先生持参の望遠鏡写真なるものをもって、スナップ撮景。
- 二月 八日 中台の賢義氏より木村先生の伝言あり。民謡について。夜、先生の宿を訪したり 自分で手掛けようとするところに、千葉氏よりも電話あり七時頃参向。十一時まで千葉、工藤氏等と共に漫談。明日（木挽姿）のデザインすることとなれり。
- 二月 九日 十時家を出ず。木村先生既に出動されて、直ちに仕事にとりかかる。「あっぱ」一人「もでる」に頼んで来、僕は倉から俵に俵を搬出して櫓へ荷付けして「ポーズ」をとらせる。先生、写生さる。そして直ぐ、素材を選んで、仕事にかかられた。
- 午後、先生が午餐にかえられた後、アトリエ掃除にとりかかり、アトリエへ引越し。
- ポスター 組型
人形台板 厚さ四分 長さ 幅 共に一分増
明日の予定。朝九時の事。サンプル作成。
- 二月 十日 午前九時より開講式。講師訓辞。直ちに練習にとりかかる。
- 彩色
- まんと 靴—墨、マント—墨、胡粉、ぼつち・唇—丹。
- 櫓引女 上張—藍、墨、胡粉（農婦の色と同じ）、もっくら—毛布色に少量胡粉、俵—黄、袋赭（菰の色に黄余分に入れる）。風呂敷—俵の緑（俵の色に黄少量加る）
- 箱 櫓 きもの—藍・胡粉、きもの縞—藍、エプロン—胡粉、ボッチ—丹・胡粉、布団—紅殻・胡粉（又は黄）、布団模様—胡粉・紅殻、袖口—黄 櫓—
- 毛 布 毛布—朱土・少量胡粉、もっくら—朱土（主）・紅殻、もっくら縞—右色に墨、足—袋赭・少量黄。
- 農 婦 きもの—藍・胡粉・墨少、こも—黄・小袋赭、ふろしき—黄・少ベニガラ。朱（マントのボッチと同じ）、帯—朱、唇—朱、ほほ—袋赭。
- 毛 布 脚(足)—紅殻・朱土、縞—右(足)に墨を入れる。
足—袋赭・黄、毛布—朱土・胡粉、
(毛布)もよう—朱土・胡粉、目—墨・小胡粉。
- まんと 足—袋赭・黄、〃点—黄、まんと—ベニガラ・朱土、

//モヨウー右に墨を入れる、ボッチー朱・少ベニガラ、
 ■当フトンー同じ、紐ー丹
 牛 追 腹当ーもも引に胡粉■たた入れる、もも引ー農婦の色
 と同じ、面・手ー朱土(にかわなし)、手拭ー胡粉、
 //モヨウー腹当の色、唇・棒ーベニガラ、
 ほほーベニガラ。
 箱 櫛 高さ二寸五分。長さ二寸六分。巾二寸。
 幼女像 洋服ー丹・岱赭・胡粉、エプロンー胡粉、模様ー藍・
 紅殻、髪ー全色、眼ー全色、顔ー胡粉・紅殻少
 少女像 ふろしきー丹・朱土少・胡粉少、半天ー紅殻・朱土・
 藍、わら靴ー岱赭・黄、//点ー黄、顔面ー胡粉・少量
 紅殻(極かに稀■)、モンペ(地色)ー丹(少量紅殻・
 少量朱土)、全縞ー藍に右の色
 ボンボン入れ 風呂敷ー朱・紅殻(少)・胡粉、羽織ー右の色に
 紅殻・藍(又は墨)、モンペー紅殻・朱土、足部(藁靴)
 ー後来の色に全じ

三月 三日 講習修了謝恩会費

千葉處三、長谷川精一、浅井宇一、花海清人、黒沢猪太郎、
 黒沢仁吉郎、黒沢武助、片山与助、青山実、上田貞三、広島
 秀雄、中村幸三、千葉茂、渡辺幸三、佐藤良順(不参)

(会費一円五十銭)

式順

- 一、開会の辞
- 一、監視官の訓辞
- 一、講師の訓話
- 一、来賓の祝辞
- 一、講習証授典式
- 一、記念品贈呈

出席者 木村講師、町長、校長代理、工藤先生、組合長、
 安保助役、黒沢猪太郎、黒沢仁吉郎、黒沢武助、
 片山与助、青山実、上田貞三、広島秀雄、中村幸三、
 千葉處三、花海清人、長谷川精一、渡辺幸三、
 計十六名。

三月 四日 午後二時、木村先生宿を訪ふ。

組合長より木村先生へ

百五十円ー修料。六十円ーサンプル代。五十円ー旅費。

計二百六十円。

先生、「おけさ踊」稽古。昨夜から僕の宿へ移って居る。旅芸人

を頼んで、千葉氏と三人、少酒を酌みおどりを一生懸命稽古する。

畏賜御買上之光栄 木彫二種 山かへり 水汲

製作発売元 大島農美生産組合 伊豆大島元村

三月 五日 午後五時、木村先生帰京。工藤先生と僕と見送り。

千葉組合長は所用の為不参。

以上が昭和3年の講習会から同5年の講習会までの活動経緯を抜粋したもので、この期間の出来事や講師木村五郎の交信等が詳細に書かれている。

この日記に驚くべき出来事として「浅井小魚の暴言問題と退会」がある。

昭和3年11月1日の『鹿角時報』(文献26)に大湯農民美術生産組合(以下「大湯農美組合」)が発足した記事が載っている。組合長に千葉茂、副組合長に花海の名前があるが、講習会開催の功労者であった浅井の名前が見当たらないので疑問に思っていた。

浅井の暴言とは、退会する原因は何であったのだろうか。

3) 評価、販売と拡大

ア 評価

昭和3年10月11日、講習会中、終了後に製作した木彫人形の出来栄えを見てもらうため木村五郎のもとに作品を送付する準備を行っている。その評価が同年10月20日に大湯農美組合に届き、その全文を花海が日記に書き留めている。

十月二十日付、木村五郎先生の書信。作品評価。

(1)毛布の×××(模様を表現)。これは胡粉だけではありませんか？朱土を少し入れる方が良いと思います。石川氏のもの上出来。黒沢氏のものも講習中のものより非常なる進歩。但し、両君のもんぺいの縞をもつと太く間部を狭くして欲しい。黒沢氏の底面に○印をつけたものは頭が長過ぎるから今後注意を希ひます。以上 上出来次第とします。

(2)「まん」と色はうすいと思います。形は共によくない。黒沢氏のもののはヅキンの中が広いし、石川氏のもののは反対に貧坦。紐も両方悪いからサンプルと比較研究して欲しい。以上 中出来次第。

(3)「牛追い」色がみなきたない。もつと藍を胡粉で色を軟らかくして欲しい。胸掛けの布をもも引の色より、胡粉を余計に入れて浅色となし、もも引と胸掛けの色を判然と区別しなくてはいけないと思います。講習中色彩についての鄙記をすぐ読んでください。色が他の色の部分にきたものらしく、はみでいたり、他の部分をよごしているのが、非常に目障りです。この点はよく注意して過つて他の部分をよごした際は直ちに消しておきませう。全部胸掛の布の裏(素地の部分)に絵具がきたなくつけていますから刃物にて綺麗に削除してください。先づ 涙をふるつて次第とするところです。

(4)「農婦」全部きもの色が悪い。藍をもつと効かすことは牛追に同じ。講習中の千葉氏の作品と比較し、猶、千葉氏の教へを乞ふ必要がありませう

面の色(岱赭)は塗らぬこと。これは講習中、牛追ひと対比上、然るべく訂正した筈です。瀬川氏第二、第四回のものがよく、一、五回のもの落第。二、四の顔の描き方は上手と思ふが、他の色の塗り方が不注意であり粗雑であります。従って色鮮明に非ずちぢ臭し。三回のとの顔小さく四回のもの頭が大きい。横からみるとこのところ一層ひどい。五回のもの最も巨頭みにくい。腹は凹み脚は太い。第一回のもの体がいがんでいるが目立ちます。猶 強て コモの厚味が厚すぎます。無名氏のもの厚さが適度と思います。無名氏のもの色が鮮やかでないこと瀬川氏と同然。但し、顔は可愛ゆし。藍の色が千葉、勝平氏の如くよかったならば 引立ったことと思ひ遺憾です。胸の紐の色が薄くて消えさうな感じであること、帯の描き方が乱暴で、きもの部分まではみ出ている等注意すべきです。石川氏のもの腹に凹みがなすぎて竹筒のやう。黒沢氏のもの何処が何んと云ひ難いほど形が全部いけません。小頭、巨腕、横肥りにくい。比較的で頭の描き方よろし。

以上 藍色が悪いために劣作となります。

三四点落第とします

総じて初めての作品としては、上出来かと思ひます。山本先生、産業部の方は喜んでおられるようですが、私としては余り感心しませんでした。千葉、勝平、高瀬、花海、玉井、与四郎さんの清君の■■■はできませんが 瀬川のもの初めてとしては上等。一層の奮発を希望します。

無名のものは誰ですか。知りませんか。もう少し注意をして下されば優作になりさう。以上 感想を申し述べます。

農美研究所出張所にて 木村五郎

大湯農民美術生産組合 御中

手紙を要約すると、大湯農美組合員が製作した作品を見た山本鼎や農民美術研究所は高い評価を与えている。しかし、木村は「毛布」・「まんこ」に合格点・次第点を与えたが、「牛追」・「農婦」は劣作、その内3・4点が落第という厳しい評価を与えている。

彼がこの手紙で組合員に伝えたかったのは「土産品の木っ端人形」であっても「彫りや彩色が粗末なものは誰も欲しいとは思わない。丁寧な仕事をして欲しい」という励ましかったのではないだろうか。

大湯農美組合や浅井は、作品の周知を図るため各地の展示即売会に出品している。昭和4(1929)年12月5日の『鹿角時報』(文献28)に、

一等賞得た 大湯木彫人形 全国共進会で

新潟県農会主催にて去る十一月一日より、五日間同県新発田町に開催された全国副業共進会に於て我が大湯町浅井末吉氏の出品したる木彫十和田人形は一等賞を得、同じく大湯木彫組合より出品した木彫人形は二等賞を授与され、(中略)本県副業界のため万丈の気を吐いた。

とある。

この記事から大湯農美組合や浅井は、都道府県単位の比較的小さな展示会等にも出品し

評価を高めようと必死に活動し、浅井は新潟県新発田町で行われた全国副業共進会で一等賞を、同じく大湯農美組合(作者不明)は二等賞を得ている。

昭和5年5月21日、大阪府財団法人富民協会が主催した第二回全国農民芸術品展覧会に大湯農美組合は「大湯彫人形」の名で人形110点を出品している。この展覧会には勝平得之(以下「勝平」と言う)が秋田風俗人形74点、小坂町の諏訪一夫が木彫人形(大湯彫人形)60点を出品している。さらに出品者名簿の秋田県の欄には「十和田人形 浅井末吉」と「あけび蔓製花籠(注7)5点 大湯町 及川鐵郎」の名前もある(文献29)。

翌年5月1日から東京三越呉服店を会場に第三回全国農民芸術品展覧会が開催された。大湯農美組合、浅井、勝平らは木彫人形を、及川鐵郎はあけび蔓製花籠を出品し、この時、勝平は銅牌をもらっている(文献30)。

この時の審査員を山本鼎が務めており、

秋田県 大湯人形もだんだん良くなってきた。勝平氏のものはなおさら結構と評価し、特に勝平の作品については絶賛している(文献31)。

このほかに大湯木彫人形を評価したものとして仙台鉄道局の『東北の玩具』(文献32)がある。これは昭和12(1937)年に日本旅行協会が発行したもので、

「大湯木彫人形」について

昭和三年彫刻家木村五郎氏の創案になり、大湯農美組合が製作してゐる。と簡単に紹介しているだけである。

しかし、勝平の「秋田風俗人形」については、

昭和三年版画家勝平得之の創案になる、藝術の香気高きものである。天真流露、郷土風俗によく童心を躍らしてゐるもの。新玩としてはけだし最良のものであろう。

と褒め称えている。勝平はこの頃、版画製作の技術(鑿や彫刻刀の使い方)を習得しており、大湯農美組合員との技術の差は歴然としていたと思われる。勝平の人形製作が昭和3年の大湯の講習会から始まっていることを記載していないのは残念である。

イ 販売と拡大

大湯木彫人形の製作目的は十和田湖や大湯温泉の観光客や宿泊客を対象にした土産品の創出であった。その当時の十和田湖の観光土産として好評だったのが「蜂蜜」であった。

昭和3年11月1日の『鹿角時報』(文献26)に、

「大湯の名物」

新しい名物は工藤仙一君の発案に始つた農民美術木彫人形、牛追ひや毛布姿「アツバコ」姿の木彫は農民美術研究所山本鼎氏の高弟木村五郎氏指導のもとにはじめられ今は弟子の連中が組合や工場を設けて盛に製作して居る。新しい大湯の名物ではあるが名物としては絶好の価値があると云ふもの。

とあり、大湯村(町)では新たに創出された木彫人形に期待をよせていた。

昭和3年の講習会以降、大湯農美組合(組合長は千葉茂)、浅井(退会後に当初からの「大湯土俗生産組合」の名前を使い活動)は精力的に全国各地で行われた展示会や即売会に出品

し、作品の周知と販路拡大と評価を得るため活動を開始した。

まず、大湯農美組合では同年9月23日に京都博覧会に出品する準備を進めた。同時に地元への浸透をはかるため同年11月1日の大湯町制施行祝賀会に合わせて開催する展示即売会と同11月中旬に花輪町で開催する展示即売会の準備を進めている。PL13-1・2は花輪の町通りで商いを営んでいた方から寄贈されたもので、恐らくこの二点は花輪町の展示即売会が行われたときに買い求めたものと思われる。

京都博覧会とは、昭和天皇の御大典を記念して行われた「御大礼記念京都大博覧会」のことである。昭和3年9月20日から同年12月25日にかけて二条城や京都帝国博物館等を会場に行われたもので、御大典の行事と重なり非常に賑わったと言われている。

その時の記事が昭和4年1月16日の『秋田魁新報』（文献33）と同年1月20日の『鹿角時報』（文献34）に載っている。

『秋田魁新報』（文献33）は、

大湯人形歓迎さる 東京、京都方面に於て

農民美術として期待された十和田土産大湯木彫人形は目下冬閑期を利用して十数名の組合員は毎日組合に集合精進してゐるが本部にある木村五郎氏は大湯の組合員の作品とともに同型の大型を京都の御大礼記念博覧会、その他の展覧会に出品宣伝された結果作品は東京京都方面に名声を博し作品は全部同方面で販売されて居り極めて好評である。

『鹿角時報』（文献34）は、

大湯木彫人形も農閑期を利用して毎日組合員の手で彫り刻まれて居りますが東京、京都方面に名声を博し製作が間に合はない位の注文があるさうです。

と報道している。

この記事から京都で開催された博覧会で評判となり完売したこと、農閑期の製作だけでは間に合わない程の注文が大湯農美組合に舞い込んでいたことがわかる。

大湯農美組合では作品の周知と販路を広げるため人形を入れる箱(PL22-左)やラベル、葉を作成しており、『花海日記』に葉の原文が残されている。

「牛追い」

粗布の真中程に穴あけて、面突き出した閑々たるいで立ち、
白樺茂る牧場をば、郭公靄ふるはして啼く。
まだき、いで立ち、水に浴ふて下り、水に浴ふて上る。
日に三里、羽立は二日、牛と牛追ふ人と、歩み急がず、
月も亦彼等が上に閑々と照るなり。

「農 婦」

起き伏しの山のつらなり、そは遠き北の高原、光る風、南より吹けば、
此の国満月の青き木草、一せいに打ち摩く、かかるとき、旅する人よ、
はからずも通りすがりに、赤き青きむらさきの布に、おもて包みてあやしくも、
切なる唄唄ふよと、見ることのあらば、日除の莫屋徹しむれ立つ、
草のいきれに肌しとしとと濡し 胸張りて郷唄うたふ、

そはあわれ乙女と知りたまへ。

紹介文はいずれも散文詩調で人形のモチーフに合わせ、大湯町周辺の風景を牧歌的に文章化している。

さらに昭和6年には販路拡大のため木村五郎が示した四種の人形(PL7)のほかに、鹿角が鉾山地帯であるという特徴を生かして、鉾夫をモデルにした新たな人形等を製作した。

同年3月12日の『秋田魁新報』(文献35)では、

大湯人形に新しい趣向 鉾山国風俗を

鹿角郡大湯町土俗人形製産組合で製産してゐる人形は主として農業に関係ある方面のものがサンプルとなつてゐたが獣医諏訪保氏は鹿角郡は由来鉾山国として名あり、従つて人形にも鉾山に働く「金掘る人」「金運ぶ婦人」などあることが有意義であるといふので、昔の坑夫の服装、カンテラ、アテシヨ(腰に付けた吠)の類につき研究をした結果、大体の見本を完成したからさらに名物が殖えるであらう。

と新作を紹介している。その人形がPL14-9である。

大湯農美組合の販路拡大には勝平得之も大きく係わっている。『花海日記』には販売用の箱を製作するため勝平が秋田市内の箱製造元と掛け合ったという記録等もある。また、昭和8年11月に発行された雑誌『版藝術11月号』の表紙には大湯木彫人形(雪童・農婦)を彫りこんだ版画が採用されており、多くの版画家や愛好者の目に触れたものと思われる。

一方、浅井は退会後数人の弟子を取り、大湯土俗生産組合の名前を使い製作活動を開始した。『花海日記』によると昭和3年10月9日に大湯村のホテル(大湯ホテルと思われる)で行われた活動写真撮影に自身の木彫人形を出し周知を図り、同時に十和田湖や大湯温泉のホテルや旅館等に販売を委託した。また評価と販路を得るため精力的に各地の展覧会や百貨店・物産館等に出品しており、その出品先が彼の『人形制作控』(文献3)に収録)に記録されている。

昭和3年12月7日の『秋田魁新報』(文献36)には、

土俗人形個展 浅井小魚氏作

鹿角大湯の土俗人形は組合の粉糾などがあつたが益々個人的に発達し来り俳人にして木彫の第一人者たる浅井小魚は数十種二百個位出来たので近日中当市で個人展覧即売会を開く由。

とある。この記事から、彼は木村五郎が創作した四種の人形のほかに小魚自身が創作した人形(PL16-19・21・23)を出品していたことがわかる。文中の「当市」とは恐らく秋田市のこと、会場は秋田県物産館と思われる。

浅井の『人形制作控』には、

- 東武名産展覧会出品申し込み品数、大小九十八ヶ、木箱包装一個
四月十五日毛馬内駅より発送、内戻り十三ヶ
- 郷土人形並玩具陳列会出品目録秋田県物産館内
小五十ヶ、夏二種、六十銭。冬二種、五十銭
- 物産館よりの問いに答えて

十和田人形の由来、昭和三年八月彫刻家木村五郎先生来講創作によりしもの。

特長、打鑿仕上げ。年度額、昭和三年より四年四月迄六百個製作。

県陳列会に出展せしは小型にて本型は一個七十銭より六十銭也

岡山県趣味の玩具展覧会	二十個
和歌山県趣味の玩具普及会	三十個
秋田県物産館出品	三十個
札幌物産館	二十個
盛岡市産業課	三十個
新潟 小林烏啼	二十個 (十二月二十日)
全国産業陳列大会	
福井県商工陳列処	(昭和五年三月)
第二回全国農民芸術品展覧会	六十個 (四月二十日)
東北六県工芸展覧会	三十個
愛知県副業農芸品展覧会	六十個
福井県物産館	(六月)
六県共進会	(十月)
秋田県物産館	四十六個 (十二月)

と出品先や出品数が記録されている。この控から昭和3年の講習会から約1年間に千個余りの人形を製作し、展覧会や即売会で販売していたことが分かる。

また、販売にするに当たり人形を入れる箱(PL22-右)と

十和田人形は我が国東北に於ける農民美術の第一声であります。そは周囲民俗の表象です。隋て又湖山景勝のしたたりともいひまじやう。

創作者は木村五郎先生風俗人形四種ボッチハ秋田の風、毛布、日ごも、腹当、共に湖山円周の俗、

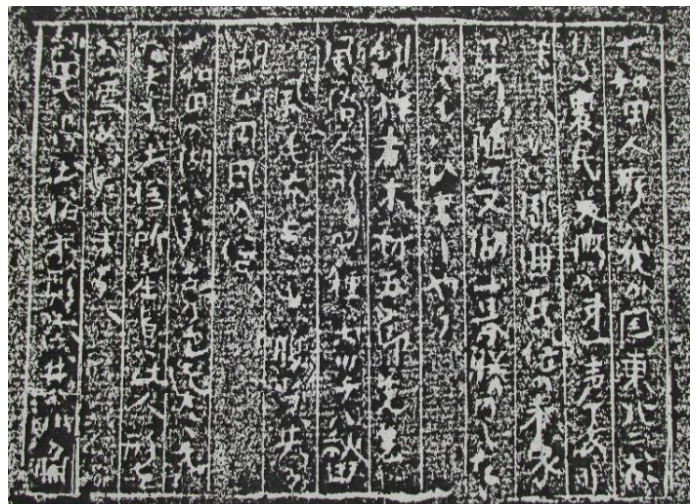
十和田の湖は万古の色をたたえてゐます。土俗所産者に此人形をお薦めいたします。

秋田土俗木彫 浅井小魚

という葉を版刷り(第6図)して箱詰めしている。

しかし、この時すでに小魚は大湯農美組合を退会していたため「大湯彫人形(大湯人形)」の名は使えず、「十和田人形」と名付け、販売を行っている。

浅井家には昭和8年に東京で開催された東北振興会主催の第八回東北名産品陳列会に出品した時の「出品荷物」(第7図)が残されている。



(所蔵者：浅井沅二)

第6図 小魚が販売時に添えた説明書

これは会場までの運賃割引票で、東北の鉄道省路線の各駅から秋葉原駅までが割引区間となっている。

この「出品荷物」から浅井は昭和8年頃も製作・販売していたことがわかる。

昭和6年8月22日に澄宮殿下(三笠宮崇仁親王)が来秋している。その時「御献上特産品」の中に、勝平の秋田風俗人形と大湯農美組合の犬の人形が含まれている(文献37)。さらに澄宮殿下は姪の照宮様と孝宮様のお土産として十和田人形と秋田風俗人形を買い求めており、これが秋田魁新報(文献38)に紹介されている。皇族お買上という名誉と共に知名度も高まり、販売拡大につながったものと思われる。

このほか、昭和9年2月21日の『鹿角時報』(文献39)には、同年4月から大阪三越で開催予定の東北銘産品陳列会に大湯町より木彫人形や蜂蜜等約百点の出品依頼があったことが記載されている。

4) 木彫人形の作者たち

『鹿角時報』、『花海日記』等から講習会参加者や組合創立に携わったのは浅井末吉、黒沢猪太郎、工藤要四郎、上野芳雄、上田貞三、高瀬善治、及川鉄太郎、千葉悦三、石川四郎、青山実、勝平得之、工藤要四郎、勝平得之、長谷川義蔵、花海清人、高瀬善治、長谷川精一、片山与助、中村幸三、諏訪一夫、浅井宇一、伊藤良順、玉井三郎らである。

下記に代表的な作者を紹介する。

ア 浅井末吉(小魚)

明治8(1875)年、現在の鹿角市十和田大湯に生まれる。生業は鍛冶屋。明治24(1891)年にキリスト教の洗礼を受け、同36(1903)年に大湯ハリストス正教会の管理者となる。

当初「月太」と称して俳句の創作活動を行うが、その後「小魚」に改めて中央の俳人達と交流する。PL19-42・43は月太の揮毫から初期の作である。

大正から昭和初期に鹿角地方の郷土資料の収集や遺跡探求を精力的に行い、昭和6(1931)年に大湯環状列石を発見した。発見後、諏訪富多や高木新助(注8)、花海らと大湯郷土研究会を設立し、遺跡の保存と研究に尽力した。

昭和3年に大湯で開催された「風俗人形木彫講習会」に勝平得之らと参加し、木彫人形の製作を学ぶ。同年6月、大湯土俗生産組合を立ち上げ時に組合長となるが講習会途中で他の組合員と意見の食い違いが発生し、大湯農美組合設立前に退会する。

イ 花海清人

明治35年、宮城県大崎市(旧古川市)に生まれる。幼少期に家族と共に大湯村に転居し



(所蔵者：浅井沩二)

第7図 第八回東北名産品陳列会出品荷物票

た。大湯村（町）役場に勤務し、昭和3年と5年の講習会の事務を担当しながら人形の製作を学んだ。大湯周辺の台地を歩き土器・石器等の採取を趣味とし、浅井とともに昭和5年に菩提野遺跡の発掘調査に参加している。大湯環状列石の発見に伴い諏訪富多や浅井らと大湯郷土研究会を創立した。公務の傍ら作品を多数製作したが、昭和10年8月24日に発生した大湯川の氾濫により大半の作品を消失した。俳人としても活躍した。

昭和3年の講習会には石膏細工も講習科目(文献21)に入っていた。石膏細工を製作したのは花海だけであったようでその作品がPL15-13である。昭和6年に鉾山地帯である鹿角の特徴を表した鉾山労働者をモデルとした木彫人形も製作しているが、石膏細工と同様、作品を確認できたのは花海の作品PL14-9だけである。

ウ 高瀬善治

明治33(1900)年、青森県上北郡十和田村大字奥入瀬字十和田(現在の十和田湖畔休屋)に生まれる。大正5(1916)年頃に木地を修行し、コケシ作りも習ったという。大正7(1918)年に独立し、休屋で土産店を営みながらコケシ作りを続けた。

エ 長谷川精一

コケシ職人として長谷川清一の名があるが同一人物である。明治31(1898)年、鹿角郡十和田町城ノ下(現在の鹿角市十和田毛馬内字城ノ下)に生まれる。大正3(1914)年頃に日光から来た小林弥七から木地(ロクロ引き)を習い独立した。昭和20(1945)年頃までコケシを製作したが、それ以降は大湯町で雑貨屋を営んだ(作品はPL21-左)。

大湯町でコケシ作りが盛んになったのは大正時代中頃からである。大正9年に大館・毛馬内間を結ぶ秋田鉄道が開通し、十和田湖への観光客が増加した。そのころ観光土産の開発に取り組んでいた大湯ホテルの諏訪富多が大正10年に鳴子系コケシの作者小松五平を工人として大湯に招き、開始した。

しかし、作品は思うように売れず十和田湖まで売りに歩いたという。このような状況からコケシ職人であった高瀬善治、長谷川精一は収入を確保するために木彫講習会に参加したものと考えられる。

なお、大湯木彫人形には他の農美組合には見られない「ボンボン入れ(PL14-10)」がある。これは組合員の中にコケシ職人が存在していたことから生まれた製品と考えられる。

オ 勝平得之

明治37(1904)年、現在の秋田市大町に生まれる。本名は徳治。家業である紙漉き業・左官業を引き継ぐ傍ら絵を描いていたところ竹下夢二の絵に惹かれて浮世絵を始め、独自に色刷版画の研究を行う。昭和3年に大湯村で開催された「風俗人形木彫講習会」に参加し木村五郎より指導を受けた。これが「ふるさと秋田の風景や風俗」を描くきっかけとなったと言われている。同時に版画では自画・自刻・自刷の色彩技法を完成させ、この頃に名前を徳治から得之に替えている。勝平はこの講習会以降10年余りの間「秋田風俗人形」(PL17-28～PL18-36)の名で人形を製作し、生計の一助としている。

昭和10年、秋田を訪れていたブルーノ・タウト(ドイツ生まれ、建築家・都市設計家)と知り合い、彼によって世界に作品が紹介された。代表作として、「大日靈貴神社祭禮舞楽図八部作」等がある(文献40)。

勝平は、昭和3年12月25日の『秋田魁新報』（文献41）に「農民美術 大湯人形について」と題し投稿している。秋田魁新報社から転載許可を得たので全文を紹介する。

山本鼎先生が大正八年長野県神川の一村落に農民美術の種を植付けて以来全国農村都市にも普及し、各地方の農民美術生産組合からは木工、木彫、版画、風俗画、刺繍、染色品等の地方土産として、郷土色に富んだ色々な美術作品が花やかな実となって、社会に提供された農民美術は、農村都市に副業的な産業、工芸の新領土を開拓する使命のもとに生れた。

農民美術生産組合はその使命のもとに農閑期を利用して、「趣味と利得」を得つつ美を愛する農村都市の人々によって成る。

農民美術！それは郷土から生まれるところの土臭い美術である。

去八月大湯の人々によって農民美術の講習会が開催された。日本農民美術研究所からは講師として日本美術院同人木村五郎氏が派遣され、風俗人形のサンプル製作にとりかかれた。

冬期風俗—毛布人形、ぼっち人形

夏期風俗—こも人形、牛方人形

この四種である。

冬期—雪—しかも吹雪の中を赤、薄青、鼠色などの毛布をかぶった群が、無言に進む—もっぺ、藁靴、それも雪国だけが持つところの情緒—。

それは雪国風俗の一つである。宿の女中さんが、八月のやきつく暑さにも拘らず毛布をかぶってモデルとなった。それが、我々の毛布人形となって生れた。

雪を喜ぶものは、犬と子犬のように嬉々として遊ぶ子供達——村童である。かぶるものは真赤なぼっち、藁の長靴——。

それは雪国秋田風俗の一つである。真赤なぼっちは、秋田から来た七十余歳の婆さんの手によってなり、勇敢な一少女がこれをかぶってモデルとなった。それが、我々のぼっち人形となって生れた。

夏期—夏は秋田の草取にせわしい農婦—真赤、だいたい、退赦などの切れをかぶる。（それは若さによってかぶる切れの色を異にする）—暑さをふせぐゴザを身につけた農婦姿—それは鹿角大湯の青田にのみ散見する。

それは大湯風俗の一つである。一会員が、しおらしくも真赤な切れをかぶりゴザを身につけメイクアップよろしく、農婦になりすましてモデルとなった。それが我々のこも人形となって生れた。

九十九曲りあるといふ間だるこい十和田沿道に、詩趣を添えるものはこれ……。

一つの鞭を手にして数十頭の牛を左右する異風な牛追姿。それは神秘境十和田のもつ使者である。木村五郎先生は十和田遊覧の節、この牛方を見て、「これはよいモチーフだ」と私を顧みていわれた。明くる日、私は牛方の青い前垂れを、身につけてモデルとなった。臭気ふんふん鼻を打つは何！、人間

の臭気？けものの臭気？さては彼等の汗の臭気か、私はこの臭気に苦笑しながら、彼らの生活を思うた。それは、我々の牛方人形となって生れた。

我々は鑿、小刀を持って一片の朴材を懸命に彫りはじめた。そして、色々な困難を越えて作者のみ得るところの愉快を知った。朴材一寸五分角、高さ三寸五分の小品ではあるが、我々の魂の吹き込まれた作品は、

サンプル——木村五郎先生

彫刻——各生産組合員

作品——木彫風俗人形

である。

一個の型から作る処の、泥人形と違って、木彫人形は一個一個彫る故に、同一作者が同一風俗人形を十個作っても、一個一個その顔の感じが違い、肉づけが異なっている。木彫——それは東洋的な風味を持つ風俗人形——それは、地方土産として郷土色を多分に持たなければならない。我々の作品は大湯を、秋田を、十和田をも象徴した土産として、又、観賞資料として絶好なものと思ふ。我々は木村五郎先生のこの作品を永久に大湯の、否秋田県の誇りとして伝え、又、大湯農民生産組合を生んでくれた大湯の人々や、県当局に深く感謝するとともに、この事業に努力して、それに酬ひんとするものである。

大湯農民美術生産組合が生れて、未だ日浅くその技術が未熟かも知れないが、我々はみな若く、みな強い。そして我々の郷土は美しく、我々の自然は楽しい。

もし、お互いが未完成であるにしても、我々の友情は深く、信頼は篤い、だから今といわずとも、我々の仕事が輝かしいばかりの花を開く時のくるのを信じている。

大湯農民美術生産組合の作品は、只今、県物産館で販売している。

以上が全文である。

PL5(11 頁)の4枚の写真は『童心の彫刻家 木村五郎資料集 I』(文献 19)に収録されている昭和3年の講習会の写真である。勝平の投稿記事、写真に写し出された一心不乱に彫刻刀を動かす講習者の姿から作品への強い意志を感じ取ることができる。

わずか一寸五分角・高さ三寸五分の朴の木っ片から彫り出した木彫りの人形だが、やがてこの製品が大湯や秋田県を代表する土産となることを信じ、彫刻刀を動かしていたものと思われる。

勝平は版画・風俗人形の製作の傍ら、昭和5年8月22日から田澤村(現 仙北市田沢湖)小学校で開催された農業美術講習会の講師を務めている。主催は仙北郡農会、後援が秋田県農会によるもので、秋田杉を利用して、田沢湖周辺や抱き返り溪谷等の風景を浅彫りした壁掛や菓子盆等の製作指導を行っている(文献 42)。

3 組合の分裂

昭和3年8月からの講習会開催のため「大湯土俗生産組合」が設立された。組合の創立と運営に尽力した一人が浅井末吉であり、その組合長に就任している。

しかし、同年11月1日の『鹿角新報』(文献26)の記事によると組合名が「大湯農民美術生産組合」に変更され、選挙が行われ組合長に千葉茂が選出されている。

なぜ、組合名や組合長を変更したのか。浅井がなぜ組合から退会したのか。

その疑問を解く資料が同3年11月10日の『鹿角時報』(文献43)の中村次郎(注9)の投稿記事や同年12月5日の『秋田魁新報』(文献44)である。

中村次郎は文献43に下記の内容の文面を投稿している。

大湯十和田の精神文化 土俗生産奥の院 今如何？

大湯が村より町となる。

(中略)

何よりも精神上の文化の産物としての例の土俗生産の完成である。是れに対しては大湯の人が考へてるよりも周囲の人が夫れに掛けてる期待が大である。

さう思ふて私は東京朝日秋田版、及朝日グラフに写真をとつて紹介した。

其後遠く朝鮮方面からも地元に照会があつたと聞いて居る。私の知っている有力な人で二人ばかり、わざゝゝ是を求めて大湯に行つたが遂に求め兼たと云つて遺憾の意を表して居た。風評ではあるが、この芸術品に対して二つの派があつて勢力争ひをして居るとのことであるが事実としせば苦々しき限りである。希くは単なる風評であつて呉れゝば好いと思ふ。

十和田と云ふ人工の芸術と相俟つて其処に美しい自然と人生の調和が見出される。

十和田や農民美術を只単に金儲けの材料とのみ考へられては美の神も泣かざるを得まい。(後略)

中村は、人形の発展を願い「朝日グラフ」等に情報を発信するとともに「風評ではあるが」と断りながら二つの組合が勢力争いをしていることを危惧している。

また、『秋田魁新報』(文献44)には、

人形組合の内訌 両者意見の衝突 有志調停を試みむとす

鹿角郡大湯町の土俗人形が生まれるまで最も力を致した組合長浅井末吉氏(小魚)は土俗人形製産組合が組合多数の意思であるといふ農民美術製産組合と改称されるに至り組合名義の改務と同時に組合長辞任し後任組合長には千葉茂氏選挙されたがその後浅井氏は製作品は組合によらず単独に販売せんとしてをるので目下大湯町の有志は両者の調停を試みんとしてをる。聞く処によれば今夏講習をうけたる人のみによる組合とすべしとの意見の衝突あるといふが折角生れかけて早くも内訌を来すが如きは惜むべきことと各方面に注視されてをる。

と組合分裂の原因を詳細に報道している。

この二つの新聞記事と『花海日誌』から、

○「大湯村土俗生産組合」から「大湯農民美術生産組合」への名称変更

○組合の改組に伴う組合長の改選

○講習会未参加の者を組合員として参加させるかの是非

といった原因が重なり、浅井の不満が増し退会したことを読み取ることができた。

木村五郎は、講習中に浅井から「組合の中で意見の相違がある」ことを聞いていた。

『花海日記』(文献4)の昭和3年10月1日の欄に、木村から大湯農美組合に宛てた手紙の一部が書き写されている。

(浅井氏は)組合員一同とは講習会から意見が合わないでいると云っていた。

兼ね兼ね、聞いては居たが、そんなに早々脱退してしまわれたか。

と浅井の退会を惜しみ、さらに同年10月15日の手紙には、

浅井氏は組合芽生の功労者であるから、円満復会を希望す。

と浅井の復会を願う手紙が大湯農美組合に届いている。

大湯農美組合では工藤仙一や高木新助を調停役に立て、浅井の説得にあたったがそれに応じることもなく、数人の弟子を取り、製作・販売活動を始めた。その頃の浅井の様子が『花海日記』(文献4)に次のように書き留められている。同年10月9日には、

本日、ホテルに於て活動写真撮影したそうだが、其節、浅井氏の木彫作品もフィルムに収められ、土俗生産組合の名に於て、宣伝を目的とせる由。

また、同年10月10日には、

自分勝手な作品をすでに十和田或は当地ホテル等に委託して、発売して居る。

と浅井の身勝手な行動を書き記している。

『花海日記』から浅井の行動を書き出すと「浅井と大湯農美組合員が不仲であった」という印象と誤解を与えてしまうが、決してそのようなことはなかった。

浅井も花海も余暇を見つけては大湯町周辺の台地(中港台地等)を踏査し、土器や石器等を採取する共通の趣味を持っていた。昭和5年に浅井の依頼を受けて木村善吉(注10)が菩提野遺跡の発掘調査を行っており、これに花海も参加している。

また、大湯環状列石の発見の経緯を書き記した浅井の『遺蹟巡礼日記(注11)』等には花海や高木の名前がよく出てくる。しかも大湯環状列石の保存と調査研究のために立ち上げた大湯郷土研究会創立にも係わっており、決して不仲ではなかったのである。

4 木彫人形の廃絶

大湯村(町)の土産品として期待を集め、数多くの展覧会等に出品し、製作が間に合わないほどの注文があった大湯木彫人形も製作・販売期間は10年程と短かった。

その原因は何であったのだろうか。

昭和7(1932)年6月15日の『鹿角時報』(文献46)に川村女学院(注12)生徒五十余名が

十和田湖を遊覧し大湯ホテルに一泊している。同 24 日には名古屋から約四百名の団体が来たという記事が載っている。鉄道の開通によって十和田湖に大勢の観光客が押し寄せ、その宿泊地として大湯温泉が賑わい、観光客は旅館や土産店で木彫人形を買い求めたものと思われるが、なぜ土産品として定着しなかったのだろうか。

大湯木彫人形は、購入者から見ると魅力ある土産品・作品であったのであろうか。人形を見て感じるようにその姿は牧歌的(田舎臭い)であまりにも素朴すぎる。

大湯農美組合や浅井は木村五郎がサンプルとして示した 4 種の人形の他に、観光客らの購買意欲を高めるため独自に鹿角・大湯周辺地域の特徴を取り入れた「金掘る人」や「ボンボン入れ」、ユニークな「カップ」を作り出していった。

しかし、東京や大阪等から来る観光客にとっては、東北のありふれた農村風景をモチーフにした人形は嗜好に合わず、購入意欲を刺激しなかったのではないだろうか。

浅井の『人形製作控』、花海の『花海日記』に当時の売値が記載されている。人形 1 個が 60 銭～70 銭(大湯農美組合は 50 銭～70 銭で販売していた)である。昭和 5 年、寿屋が販売したビール一本の値段は 25 銭(KIRIN『酒・飲料の歴史』より)であった。現在のビール(360 円前後)の値段から計算すると人形 1 個が 720 円～1000 円程度になるが、当時の物価・生活水準からみると高額だったのだろうか。事実、文献 79 には作品の割には値段が高いと書かれている。

さて、農閑期の副業・収入源として成り立っていたのだろうか。『花海日記』に黒澤猪太郎家の冬期の一ヶ月の製作個数が書かれている。家族総出で一ヶ月頑張っても 250 個程で、手元に入る収入はひと月 180,000 円～250,000 円程度(平均 215,000 円)である。

昭和初期と現在の物価、家族構成や生活水準が違うことは十分承知している。当時の農家が夏場に得られる収入がどれほどだったのか、黒澤猪太郎の家族構成(注 13)や収入等の資料を持ち合わせていないが、人形製作から得られる一ヶ月の収入から材料費(朴木代・絵具代等)を差し引くと一家の生活を支えるための収入として十分な金額であったのだろうか。しかも、黒澤は大湯農美組合員であることから日本農民美術研究所へは二割五分で卸さなければならず収入は四分の一の約 60,000 円となる。

木彫人形を作るためには材料の入手から始まり乾燥・裁断、彫刻、彩色という工程がある。この作業工程を考えると冬期間の収入がほとんど見込めない北国の農家にとっては貴重な収入になったであろうが、製作意欲を失いそうな額である。

浅井や勝平が人形製作をやめたことについては、彼等の活動からある程度推察できる。

浅井の『人形制作控』から昭和 3 年の講習会終了から約一年間で千個余りの人形を製作した。勝平が『秋田魁新報』に連載した「郷土玩具(十四) 大湯人形」(文献 45)から、昭和 12(1937)年当時、数人の作者とともに細々と製作していたことが分かっている。

彼の本業は鍛冶屋である。その傍ら、昭和 5 年～6 年頃には精力的に遺跡踏査を行い昭和 6 年に大湯環状列石を発見した。同時に諏訪富多や高木新助と共に大湯郷土研究会の創設準備を進め、さらに郷土史料の蒐集、俳人としても活動していた。浅井は本業以外でも多忙な生活を送っていたことから次第に人形製作から遠ざかっていったのではないだろうか。

勝平は昭和 3 年の講習後、生活の一助のため 10 年程「秋田風俗人形」を製作している。

この頃国内の展覧会等で版画が入選し、さらにブルーノ・タウトと出会ったことで勝平の名前が世界に周知され知名度も上がった。これにより収入は次第に保障され秋田風俗人形の製作をやめてしまったものと思われる。

大湯木彫人形の記事が秋田魁新報や鹿角時報から消え始めるのが昭和9年頃である。

昭和10年前後は日本の世情が大きく変容する時期で、この頃から『鹿角時報』には出兵・戦死記事が見え始め、次第に増加している。昭和12年の盧溝橋事件をきっかけに日中戦争が勃発、やがて太平洋戦争へと突入していく。このような戦時状況のなかで製作する時間があったのだろうか。観光旅行に行き、そこで買い求める余裕が人々にあったのだろうか。

作っても実入りの少ない収入、購入者の嗜好の変化とそれに伴う購入意欲の低下、そして太平洋戦争に突入していく世情の中で、廃絶に向かい進んで行ったものと考えられる。

『秋田県立博物館研究報告第31号(2006年刊)』に名誉館長新野直吉の「館話実施報告抄」が収録されている。勝平の項目の中で、

木村は昭和5年冬も大湯を訪れ講習したが組合の活力は続かなかった

と述べているが、『花海日記』から大湯農美組合の活動低下を読み取れないのだが。

昭和5年9月16日に東伏見宮妃殿下が来県され(注14)、その時大湯農美組合製作の「犬」を秋田県知事が献上している。翌6年8月21日には澄宮殿下(後の三笠宮殿下)が来県してお土産を買い求めているが、その時買い求めたのは浅井の作品であった。

文献45には大湯農美組合は数年で解散したと書かれている。

『花海日記』によると昭和5年11月の時点で大湯農美組合は製作を継続していたことが分かっているが、文献38から昭和6年末には製作を停止していたものと推測される。浅井も細々と製作を続けていたが文献45から昭和13年頃に製作を停止したものと考えられる。

5 勝平のサインのある木彫人形について

勝平得之は、昭和3年に大湯村で行われた木彫講習会に参加し幾つも作品を製作したと思われるが、彼の作品はこれまで確認されていなかった。

令和2年の春、毛馬内在住の方から鹿角市教育委員会へ多量の人形が寄贈された。その中に「勝平」と鉛筆書きされた大湯木彫人形(ボッチ人形、PL8-左、PL9、PL13-3)が含まれていた。これが勝平の作品であれば貴重な資料である。

しかし、本館職員にはこのサインを鑑定する知識や資料の持ち合わせがない。そのためサインが自筆なのか、作風等から勝平の作品なのかを判断するため、令和2年8月12日に勝平の作品に数多く接している秋田市立赤レンガ館勝平得之記念館の加藤隆子のもとに写真を送付、数日後に浅井が製作したボッチ人形(小坂町教育委員会所蔵品)と勝平のサインのある作品を比較した資料(第1表)を送付した。

勝平と浅井の作品を比較するため、①顔(表情)、②雪帽子、③外套、④色彩の項目を設け、さらに彫刻刀の使い方、筆の使い方等の違いを観察した。

勝平の作品と思われるものは、

①目・眉毛を描く筆使いがなめらかである。鼻筋がわずかな隆線として表現され、顔面



「勝平」のサインのある人形
(所蔵者：鹿角市教育委員会)



浅井小魚の焼き印のある人形
(所蔵者：小坂町教育委員会)

PL8 ボッチ人形

第1表 比較表

	勝平得之の作品 (PL8-左)	浅井小魚の作品 (PL8-右)
顔	<ul style="list-style-type: none"> ・目は楕円形を呈し、眉は眉尻が雪帽子に隠れる。線がなめらか。 ・鼻筋が表現されている(微隆線として表現されている)。 ・髪の毛のバサバサの表現なし ・顔と帽子の境がきれいに処理されている(小刀・彫刻刀の使い方に慣れている)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目は菱形を呈し、目尻と眉尻が雪帽子に隠れる。眉の線にふるえ。眉間が広い。 ・鼻筋の表現がない ・髪の毛のバサバサを表現している。
雪帽子	<ul style="list-style-type: none"> ・雪帽子の先端が鋭利。このため頭部が小さく見える。 ・帽子の紐の色彩を変える。そのため紐の結び方がそれらしく見える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・雪帽子の先端が鈍角。このため頭部が少し大きく見える。 ・帽子と紐の色が同色。
外套	<ul style="list-style-type: none"> ・小刀の痕跡が明瞭に残る。 ・背面の下のラインが右下がり。(着ているときの自然な流れを表現しているのか) 	<ul style="list-style-type: none"> ・小刀の痕跡が明瞭に残る。 ・背面の下のラインが水平。
色彩他	<ul style="list-style-type: none"> ・使用色は朱、橙、白、黒、黄の五色。 ・眉毛と目は書きなれた感じがする。 ・藁靴の表現は簡素だが、丁寧。 	<ul style="list-style-type: none"> ・使用色は朱、白、黒、黄の四色。 ・眉毛のラインに振れあり。 ・藁靴の表現は同じだが雑。足元の絵具付も雑。



PL9 「勝平」のサイン

と雪帽子の境目が丁寧に処理されている。

②雪帽子の紐の結び目がしっかりと表現されている。

③外套の後ろの裾のラインが歩くとできる乱れが曲線として表現している。

彫刻刀の使い方は、すでに勝平は版画製作に必要な技術を習得していたため、他の講習生とは明らかに彫刻刀の使い方等に差がみられ、細部まで丁寧に処理している。

といった違いを確認することができた。

令和2年9月4日付で次のような私信が届いた。

—人形本体について—

○全体的に、木彫作品として人体のプロポーションはとれている。

○顔の表情が現存する得之の風俗人形とは異なる。本人形は、目、眉頭が離れて穏やかな表情。得之・風俗人形の眉は、大きく弧を描き、眉頭が近い。目も中心により、はっきりした横長の杏型でどちらかというときつめの印象がある。

○人形のわら靴の表現が現存の得之・風俗人形とは異なる。大湯人形では用いられた表現なのか？

—底面の名について—

○得之が鉛筆でサインすることはあまりない。得之はサインや銘を墨でしっかりと、また、習作でもきちんと書き入れる場合が多い。

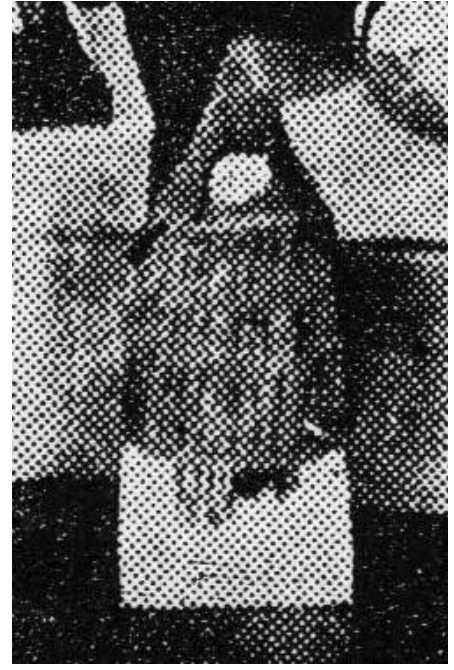
○筆跡は得之のものと違うようだ。講習会の際、得之以外の人物が、得之作とわかったうえで、記入したことも考えられる。



木村五郎作(文献 27 より)



勝平得之作(文献 72 より)



浅井小魚作(文献 38 より)

PL10 木村・勝平・浅井のボッチ人形

— 所 感 —

プロポーションどりはしっかりしているが、人形の表現やわら靴の表現が、得之・風俗人形とは異なる。底面に「勝平」とあるが、筆跡や書き方の違いから、少なくとも記入者は得之ではないと考える。

しかし、仮に昭和3年の大湯の講習会で得之が制作したものであれば、得之・風俗人形以前の習作となることから、必ずしもその特徴が合致するとは限らないので、可能性がないとはいえない。

よって、現時点では、得之が制作した人形とは断言し難い。

という内容であった。この時点で「勝平の作品でない可能性が高い」と諦めていたが、数日後、もう少し検証する時間が欲しいという連絡があった。

同年12月4日に勝平に関する新聞の切り抜きとともに再度、私信が届いた。

加藤は、昭和3年～同6年の新聞記事に添付された木村・勝平・浅井のボッチ人形の写真を頼りに、本館提出の比較表(第1表)を参考に PL13-3 を下記のように考察している。

— スクラップ記事からの考察 —

○文献 47・41 は大湯での講習会内容、講師である木村五郎が作例とした木彫人形4点について述べられている。このなかで、当該作品に類似する大湯人形は、文献 47 では「子供の冬服」、文献 27 では「冬期風俗 ぼっち人形」と考えられる。

○文献 27 の講習会の写真図版(PL10-左)を見ると、木村が考案した人形の形体がそのまま浅井小魚作の大湯人形(教育委員会所蔵作品 PL13-3)として受け継がれていることがわかる。

○一方、文献 72 の得之の秋田風俗人形図版では、類似作品として「冬の女

(目ばかり出した可愛さ)」、左から2点目(PL10-中央)があげられる。

○文献38に記載の「木製 十和田人形」とは、大湯人形と思われ、文献38図版前列中央(PL10-右)と思われる。

○図版で、文献72(得之)と文献27・文献38(大湯)を比較した場合、モノクロ図版のためはつきりと確認できないが、大きな違いとして、子供の外套の模様が文献27・文献38(PL10-右)の縞は短い線が縦に連なっているが、文献72は一本の長い縦線の縞模様となっている。また、子供の前踏みだしの足が左右逆(文献72は右足、文献27・文献38は左足)である。

(注：写真資料名等が記号化されていたことから、文意を変えないように本館が文献No.とPLNo.に差し替えた)

加藤は、新聞に掲載された三人のボッチ人形から木村の作風を踏襲しているのは浅井であること、また勝平は大湯人形(浅井は十和田人形と呼んだ)と秋田風俗人形と区別するためマントの模様や足の踏みだしを変えていることを指摘し、所感として、

得之の秋田風俗人形のなかで、大湯講習会でのサンプルをもとに制作、類似したものがPL10-中央(文献72)と考えられる。その際、大湯人形との差別化を行うため、縞模様と踏みだし足の左右を変更したと思われることから、講習会後に秋田風俗人形として、大湯人形と同様の作品を制作していたとは考えにくい。

また、以前、藤井館長により示された小魚の作品(大湯人形)との比較から、当該作品は技術的にも美術的にも高度なものであることがわかる。

当時、講師の木村五郎が、得之が制作した人形は、レベルの点で他の参加者とは明らかな差があったと語っている(注15)ことから、得之が大湯人形と同様のものを制作した可能性があるとするれば、大湯での講習会のみと推察される。

よって、底面の鉛筆書きのサイン記載など不確かな部分はあるものの、当該作品は得之が昭和3年の講習会参加時に制作したものである可能性は高いと考える。

(注：写真資料名等が記号化されていたことから、文意を変えないように本館が文献No.とPLNo.を書き入れた)

と推察している。

加藤の私信からPL13-3はサインは自筆でないが、新聞記事に添付された木村・浅井・勝平のボッチ人形(PL10)を比較すると、この作品が勝平のものである可能性が高いことが判明した。

では、作品に勝平の名前を書きこんだのは誰なのか。そのヒントを見つけるため『花海日記』を再度読み直してみた。

同年10月11日、帰京した木村のもとに講習会中やその後に製作した作品の出来栄を評価してもらうため講習生の作品を送っている。同10月23日に木村から大湯農美組合に作品の評価を書いた手紙が届いており、その全文(21～22頁)を書き写している。

その内容は、作品一つ一つに、作者毎に出来栄を評価したものではなく、人形ごとに形状、彫刻刀や筆の使い方、色彩等について細かに評価したものである。その評価の所々に作者の名前が見えることから、木村に作品を送付する前に作者名が未記名となっているものには書き込んだ可能性がある。発送を担当した組合員は千葉悦三・千葉茂・上野芳雄・伊藤良順・花海であり、この中の誰かが書き込んだ可能性が高い。

木村に送付した作品は、その後手紙とともに大湯農美組合に返却されている。「勝平」のサインの入った作品は勝平の手元に戻らず、昭和3年11月1日の大湯町制施行行事として開催された展示即売会で販売され、人手に渡ったものと思われる。

6 秋田県立博物館所蔵の木彫人形について

令和元年の企画展として「鹿角の土人形」を開催した。その事前調査のため秋田県立博物館を訪問した時に5点の木彫人形(PL18-37~41)を所蔵していることを知った。

作品は登山(3点)・釣り人(1点)・スキー(1点)を題材にしたものであった。これらは白樺や桜の幹・枝を利用したもので、人形の背面や台座にわざと樹皮を残している。

人形本体は3.5cm前後と小さく、彫刻刀の使い方は極めて丁寧である。また、登山(PL18-40)は荒々しく削って表現した岩崖を背景としており、これが大きな特徴となっている。

これまで実見していた大湯木彫人形と形態やモチーフの違うものであったことから、製作地がどこなのか気になりインターネットを検索してみた。

偶然にも長野県松本市周辺で購読されている『市民タイムス(平成28年8月11日発行)』が目にとまり、「白樺工芸品存続の危機」という記事に同じタイプの木彫人形の写真が添付されていた。

その記事によると白樺工芸品は、

登山者向けの土産として大正6(1917)年頃に松本平で製造販売が始まった。

(中略) **登山人形は、大正~昭和初期に開発が進んだ上高地への登山客が需要を生んだ**

と紹介されていた。

長野県立歴史館の岸田恵理は「彫刻の背景ー松本白樺工芸の山付登山人形についてー」(文献49)において、岩崖のような背景を持ったものを「山付登山人形」と呼び、

シラカバを用い、登山者やライチョウなどの物をかたどった手彫りの人形

や、白い樹皮を生かし風景を表した飾りなどが代表的

とその特徴をあげている。

これらはアルプス登山が盛んになった大正初期から、登山者を対象に松本市内の登山用品販売店や土産屋で手作りの杖とともに販売されていたものである。

これのルーツを辿っていくと大正8年に山本鼎が長野県神川村を拠点に展開した「農民美術運動」にたどり着き、神川村周辺の農美組合の多くの人達が登山人形の製作に係っていたと言う。松本市周辺の農美組合で作られ「木片人形」と呼ばれていたものを、昭和

に入ってから本職の彫刻家達が「白樺工芸」として完成させて販売したと言われている。

スキー(PL18-41)の底面に値札(PL11)が残されていた。その値札から湯瀬温泉ホテル(現在の湯瀬ホテル)で販売されていたものであること、「縣」の文字が旧字体(昭和24年4月28日、内閣が当用漢字字体表を告示)で表記されていることから、昭和6年のホテルの改装・改称時から当用漢字に移行するために内閣告示が出された同24(1949)年の間に買い求められたものであることが分かった。

なぜ、湯瀬温泉ホテル(PL12)でこの白樺工芸品を販売したのだろうか。

その要因として杉村楚人冠(注16)が関わっていた可能性がある。

昭和6年、鉄道省花輪線(好摩・陸中花輪駅間)の開通を見越し、関直右衛門はそれまで営業していた関直旅館を大改装し「湯瀬温泉ホテル」として開業した。

昭和9年、八幡平頭勝会は八幡平を国立公園にするため、その足掛かりとして朝日新聞社の記者であった杉村楚人冠らを八幡平観光(登山)に招いている。楚人冠は登山途中、トロコ温泉で休憩を取る際、落馬して腕を骨折している。これが「湯瀬発 楚人冠 八幡平で落馬」(文献50・51)という見出しで海外まで報道された。

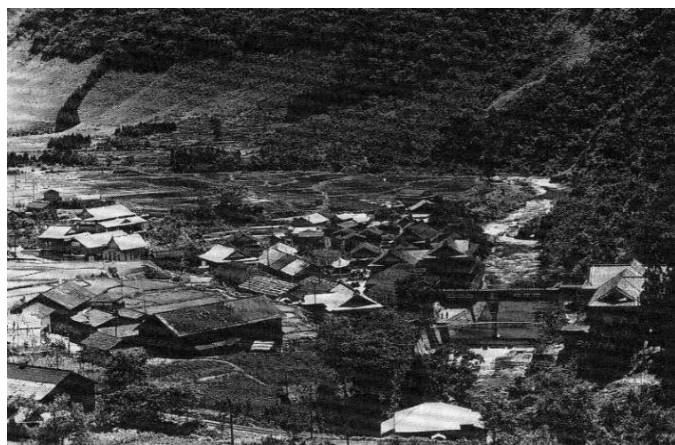
さらに関直右衛門は、楚人冠の登山前の投宿先であり、落馬後の静養先であった縁から現地に「落馬記念碑」を建立し、これも報道されている。

この二つの出来事が報道されことにより八幡平と湯瀬温泉が一躍有名となり、登山者や観光客が多くなったものと考えられる。

昭和6年末には大湯農美組合の製作活動はすでに停止状態にあった。浅井も数人の仲間と細々と製作を行っていた時期であり、報道によって増加した登山者や観光客のお土産を地元だけでは用意できなかったことが容易にわかる。ホテルでは登山者・観光客に対応するため日本農民美術研究所と繋がりがあった大湯農美組合(員)を介して松本周辺から「白樺工芸」を取り寄せて販売したのではないだろうか。



PL11 湯瀬温泉ホテルの値札



写真の右側が湯瀬ホテル(『鹿角市史第四巻』より)

PL12 昭和10年代の湯瀬温泉

ま と め

「大湯木彫人形」の企画展準備のため木彫人形を探したが、お土産として販売されたことから地元に残された数は少なかった。また、文献 3 に所有者名簿が記載されていたが家主も替わり、人形の所在を探し出すことが出来なかった。

展示解説文と本書を執筆するうえで斉藤長八が残した「没後五十年を迎えて 浅井小魚の鹿角の文化に果たした役割」、伊豆大島藤井工房の藤井虎雄、勝平得之記念館の加藤隆子から提供していただいた資料に助けられた。

昭和 3 年に大湯村を会場に開催された木彫講習会の目的は、十和田湖の観光客と大湯温泉の宿泊者への土産品と冬場の農村の副業の創出であった。

人形は、大湯周辺の農村の暮らしを題材に農婦や牛追い、角巻を身につけた娘(ボッチ人形)等の素朴なものであったが、浅井や花海によってカップやボンボン入れ、金掘る人等の新作が加えられた。

全国の博覧会や展示即売会に出品し、好評を得、一時期製作が間に合わない時もあったが大湯農美組合は昭和 6 年末には活動を停止。細々と続けた浅井でも製作は昭和 13 年頃までであった。

製作・販売期間が 10 年程と短かったのは、冬の副業としてはじめた人形製作であったが、大湯の農村家族の冬場の生活を支えるまでに至らなかった。さらに購入者の嗜好も次第に変わり、あまりにも素朴な人形のため新作を加えても購入意欲は上昇せず、そのため製作の意欲も衰えていったものと思われる。しかも、製作時期が太平洋戦争に向かう大混乱期と重なったことが廃絶を早めたと考えられる。

『鹿角市歴史民俗資料館調査資料 2 鹿角の土人形』で「瀬田石土人形・小坂土人形」を取り上げた。これも人々の嗜好が変化し、買い手を失い、作り手を失い、やがて廃絶の道をたどってしまった一例である。

大湯木彫人形も瀬田石土人形もお土産や愛玩具として購入され、各家の飾り棚に飾られていたが、いつの間にか無くなり、ついには人々の記憶からも忘れ去られてしまった。

鹿角には無形・有形の文化財、史跡、数々の民話と伝説、郷土食が残されている。

それらは地域の人々によって保存・伝承され、語り継がれているが、消失の危機にあるものもある。

「今の生活にはそぐわない。人手が足りない」と言って、人生や生活の節目の大事な行事が簡略化・廃止され、「汚い・古い・邪魔になる・時代遅れ・趣味に合わない」と言って郷土玩具、古文書・古道具類等が廃棄されている。

故郷に伝わってきた文化財や風俗等を消失・忘却することは地元民にとって大きな損失である。

皆さんの周りに伝わっている行事を廃止する前に、家の片隅で埃を被った家具や玩具、書物を廃棄する前に、次の世代に伝えていくための手立てを模索してほしい。



1



2



3



4



5



6

PL13 人形写真(1)



7



8



9



11



10



12

PL14 人形写真(2)



13



14



15



16



17



18

PL15 人形写真(3)



19



20



21



22



23



24

PL16 人形写真(4)



25



26



27



28



29



30



31



32



33

PL17 人形写真(5)



34



35



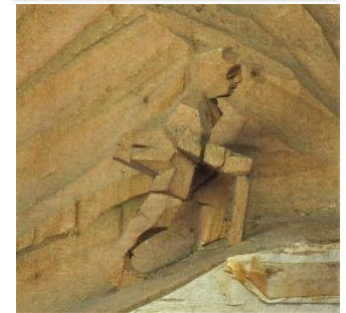
36



37



38



40



39



41

PL18 人形写真(6)



42



43



44

PL19 人形写真(7)



①



②



③

- ① 浅井小魚
- ② 浅井小魚
- ③ 花海清人
- ④ 花海清人
- ⑤ 黒澤猪太郎
- ⑥ 勝平得之
- (⑥は大湯農美組合員書き入れた)



④



⑤



⑥

PL20 作者のサイン・焼印・刻印



PL21 長谷川精一・片山与助・中村幸三の作品(資料提供：藤井虎雄)



左：大湯農美組合
 右：浅井末吉
 (資料提供：稲垣康弘)

PL22 販売用の箱

第2表-1 木彫人形観察表

PL No.	品名	法量(高さ×横×幅cm)・材料	作者・所蔵者・備考
PL13-1	橇遊び	人形：9.7×2.6×3.9 ソリ：1.6×3.3×6.5 材料：朴	作者：不明 所蔵者：鹿角市教育委員会
PL13-2	牛追い (牛方)	人形：10.0×4.6×2.5 台座：1.5×4.5×3.6 材料：朴	作者：浅井小魚 所蔵者：鹿角市教育委員会 ・底面に「小魚」の焼き印
PL13-3 PL19-⑤	ボッチ人形 (マント)	人形：8.0×4.4×3.6 台座：1.4×5.0×3.9 材料：朴	作者：不明 所蔵者：鹿角市教育委員会 ・底面に「勝平」の鉛筆書き ・底面を少し削り込む
PL13-4	農婦 (菰人形)	人形：9.3×3.2×2.6 台座：1.4×3.7×3.6 材料：朴	作者：不明 所蔵者：鹿角市教育委員会
PL13-5	農婦	人形：8.5×3.5×2.3 台座： 材料：朴	作者：花海清人 所蔵者：花海道雄、邦子 ・台を欠く
PL13-6	少女像	人形：10.8×5.6×3.8 台座：1.8×5.9×5.2 材料：朴	作者：花海清人 所蔵者：花海道雄・邦子 ・底面に「昭和五年 清」の 墨書
PL14-7	少女像	人形：11.0×5.9×4.6 台座：1.5×5.9×5.4 材料：朴	作者：花海清人 所蔵者：花海道雄・邦子 ・PL11-6の粗削り段階
PL14-8	紳士	人形：9.5×3.1×2.7 台座：1.5×5.8×3.7 材料：朴	作者：花海清人 所蔵者：花海道雄・邦子 ・着色前
PL14-9	金掘る人	人形：4.8×5.1×5.4 台座：5.4×5.8×7.5 材料：朴	作者：花海清人 所蔵者：花海道雄・邦子 ・底面に「1926 花清 習作」 の墨書、右手欠損
PL14-10	ボンボン入れ	人形：12.2×7.9×7.9 台座： 材料：朴	作者：花海清人 所蔵者：花海道雄・邦子 ・胴部中頃で分割 内部はロクロ引きで削る

※ 観察表を作成するにあたり、本館が作品の名称を付けたものもある。

第2表-2 木彫人形観察表

PL No.	品名	法量(高さ×横×幅cm)・材料	作者・所蔵者・備考
PL14-11	アイヌの長	人形：7.5×5.1×3.5 台座：3.2×5.0×3.7 材料：	作者：花海清人 所蔵者：花海道雄・邦子 ・台座背面に「12.6.24 K.H」の墨書
PL14-12	人物	人形：7.5×5.7×5.7 台座：7.3×5.7×6.0 材料：	作者：花海清人 所蔵者：花海道雄・邦子 ・PL13-13の原型となるもの。製作途中。
PL15-13	人物	人形：10.8×5.4×6.1 台座：2.2×5.4×4.6 材料：陶器	作者：花海清人 所蔵者：花海道雄・邦子 ・PL2-12をもとに製作したもの、頭部に剥離痕あり
PL15-14	牛追い (牛方)	人形：13.4×6.0×3.6 台座：1.7×5.9×5.0 材料：朴	作者：無記名 所蔵者：浅井沅二
PL15-15	農婦 (菰かつぎ)	人形：12.7×5.1×3.6 台座：1.6×5.7×4.8 材料：朴	作者：無記名 所蔵者：浅井沅二 ・底面に「三」を書き込んだ付箋あり
PL15-16	秋田犬	人形：11.0×3.4×10.2 台座：1.6×4.9×10.5 材料：朴	作者：無記名 所蔵者：浅井沅二
PL15-17	ボッチ人形 (マント)	人形：8.5×4.3×2.9 台座：1.1×4.6×3.4 材料：朴	作者：無記名 所蔵者：浅井沅二 ・着色前
PL15-18	毛布	人形：7.5×3.4×2.3 台座：1.1×3.6×2.9 材料：朴	作者：浅井小魚 所蔵者：浅井沅二 ・焼き印あり
PL16-19	薪背負い	人形：5.9×2.2×3.3 台座：2.1×2.2×3.8 材料：朴	作者：無記名 所蔵者：浅井沅二
PL16-20	毛布	人形：8.8×3.5×2.8 台座：1.0×4.0×3.2 材料：朴	作者：無記名 所蔵者：浅井沅二 ・着色前

第2表-3 木彫人形観察表

PL No.	品名	法量(高さ×横×幅cm)・材料	作者・所蔵者・備考
PL16-21	旅人	人形：5.9×3.4×2.5 台座：0.9×3.3×2.8 材料：朴	作者：無記名 所蔵者：浅井沅二 ・台座は不整形
PL16-22 PL19-④	黒マント	人形：7.8×4.5×3.6 台座：1.3×4.5×3.6 材料：朴	作者：黒澤猪太郎 所蔵者：浅井沅二 ・「猪」の墨書あり
PL16-23	カッパ	人形：8.8×3.5×2.8 台座：1.0×4.0×3.2 材料：朴	作者：無記名 所蔵者：浅井沅二
PL16-24	櫓曳女	人形：8.2×3.2×2.3 ソリ：3.4×3.5×7.8 台座：1.5×14.4×4.3 材料：人形は朴、櫓は杉	作者：無記名 所蔵者：浅井沅二 ・櫓は後に作成、付加したもの
PL17-25	牛追い (牛方)	人形：8.8×3.8×2.1 台座：1.1×3.7×2.8 材料：朴	作者：浅井小魚 所蔵者：小坂町教育委員会 ・底面に「小魚」の焼き印
PL17-26	ボッチ人形 (マント)	人形：6.6×3.5×2.6 台座：1.1×3.9×3.0 材料：朴	作者：浅井小魚 所蔵者：小坂町教育委員会 ・底面に「小魚」の焼き印
PL17-27	黒マント	人形：6.9×3.9×3.2 台座：1.1×3.8×3.2 材料：朴	作者：浅井小魚 所蔵者：小坂町教育委員会 ・底面に「小魚」の焼き印
PL17-28		人形： 台座： 材料：	作者：勝平得之 所蔵者：秋田市立 赤レンガ郷土館 ・秋田風俗人形
PL17-29		人形： 台座： 材料：	作者：勝平得之 所蔵者：秋田市立 赤レンガ郷土館 ・秋田風俗人形
PL17-30		人形： 台座： 材料：	作者：勝平得之 所蔵者：秋田市立 赤レンガ郷土館 ・秋田風俗人形

第2表-4 木彫人形観察表

PL No.	品名	法量(高さ×横×幅cm)・材料	作者・所蔵者・備考
PL17-31		人形： 台座： 材料：	作者：勝平得之 所蔵者：秋田市立 赤レンガ郷土館 ・秋田風俗人形
PL17-32		人形： 台座： 材料：	作者：勝平得之 所蔵者：秋田市立 赤レンガ郷土館 ・秋田風俗人形
PL17-33		人形： 台座： 材料：	作者：勝平得之 所蔵者：秋田市立 赤レンガ郷土館 ・秋田風俗人形
PL18-34		人形： 台座： 材料：	作者：勝平得之 所蔵者：秋田市立 赤レンガ郷土館 ・秋田風俗人形
PL18-35		人形： 台座： 材料：	作者：勝平得之 所蔵者：秋田市立 赤レンガ郷土館 ・秋田風俗人形
PL18-35		人形： 台座： 材料：	作者：勝平得之 所蔵者：秋田市立 赤レンガ郷土館 ・秋田風俗人形
PL18-37	釣り人	人形：7.2×2.7×2.0 台座：1.8×2.3×2.5 材料：白樺	作者：不明 所蔵者：秋田県立博物館 ・松本白樺工芸品
PL18-38	登山(女性)	人形：3.6×1.6×1.2 台座：2.3×2.0×1.9 材料：桜	作者： 所蔵者：秋田県立博物館 ・松本白樺工芸品
PL18-39	登山	人形：3.8×1.5×1.5 台座：1.8×2.0×2.1 材料：白樺	作者： 所蔵者：秋田県立博物館 ・松本白樺工芸品

※赤レンガ郷土館所蔵の品名は未記入とした。

第2表-5 木彫人形観察表

PL No.	品名	法量(高さ×横×幅cm)・材料	作者・所蔵者・備考
PL18-40	登山(山付き)	人形：2.8×1.1×1.0 台座：10.5×4.9×5.1 材料：白樺	作者： 所蔵者：秋田県立博物館 ・松本白樺工芸品 ・背景に山(崖)を表現
PL18-41	スキー	人形：3.0×2.2×2.2 台座：4.1×4.4×4.9 材料：白樺	作者： 所蔵者：秋田県立博物館 ・松本白樺工芸品 ・底面に「湯瀬温泉ホテル」 の値札に0-35のスタンプ
PL19-42	牛追い (牛方)	人形：10.2×4.4×2.5 台座：4.6×4.0×1.5 材料：朴	作者：浅井小魚 所蔵者：十和田図書館 ・裏面に俳号「月太」の刻 印
PL19-43	ボッチ人形 (マント)	人形：8.4×5.0×3.9 台座：4.8×3.9×1.6 材料：朴	作者：浅井小魚 所蔵者：十和田図書館 ・裏面に俳号「月太」の刻 印
PL19-44	秋田犬	犬：5.4×2.0×5.9 台座：6.4×3.4×1.0 材料：朴	作者：浅井小魚 所蔵者：十和田図書館

《注 積》

- 注 1 石井伯亭：明治 15(1882)年、現在の東京都台東区上野に生れる。洋画家、版画家、美術評論家。戦時中は戦争絵画も描く。鹿角市民の身近な作品として『大湯町環状列石（昭和 28 年刊行）』の「日時計状組石」の挿絵がある。
- 注 2 アンコ木彫人形：伊豆大島で作られている民芸品。昭和 4(1929)年に伊豆大島で行われた木彫人形講習会に参加した藤井重丸が作り始めたと言われている。資料提供者の藤井虎雄は重丸の子息である。
- 注 3 国鉄花輪線：大正 12 年に私鉄秋田鉄道株式会社が大館から陸中花輪で営業。昭和 6 年に鉄道省が好摩から陸中花輪まで線路を延伸し、陸中花輪が大館方面への乗り継ぎ駅となった。昭和 9 年に鉄道省が秋田鉄道を買収・国営化し、花輪線として営業を開始した。昭和 24 年 6 月に日本国有鉄道が引き継ぎ、昭和 62 年 4 月の国鉄民営化に伴い現在東日本旅客鉄道が管理・運行している。
- 注 4 諏訪富多：明治 16(1883)年、現在の鹿角市十和田大湯に生まれる。同 43(1910)年に東京帝国大学哲学科を卒業。帰郷して大湯村農会会長となり、中港台地の耕地整理等の事業を進める。また、十和田湖への道路整備を推し進め、その観光拠点として大正 10(1921)年に「大湯ホテル」を開業する。昭和 6(1931)年の大湯環状列石の発見に伴い、同 8(1933)年に浅井小魚や高木新助らと大湯郷土研究会を組織し、会長に就任する。昭和 22(1947)年から大湯町長を二期務める。
- 注 5 大湯村役場：当初は大湯上ノ湯に所在したが、大正 5 年 1 月 22 日に隣家の出火により焼失した。その後、役場は「在郷坂」の登り口付近に新築された。昭和 3 年の講習会はこの 2 階で行われた。旅館「かめや」は役場の隣接地にある。
- 注 6 平福百穂氏：大正 9(1920)年に日本児童自由画協会主催、東京日日新聞協賛で東京赤坂溜池において展覧会が開催されている。この展覧会に山本鼎が参加している。平福百穂はこの展覧会で樺細工の審査にあたっており、この時知り合い講習会の意匠者となったものと考えられる。
- 注 7 あけび蔓製花籠：『鹿角市史 第三卷上』によると、日露戦争による戦歿軍人の遺族援助のため、弘前から講師を招き、数回にわたって講習会が行われた。戦後、鹿角は北東北でも有数の生産地となった。博覧会等に出品し好評を得、京阪神地区まで販路が広がっていた。
- 注 8 高木新助：明治 23(1890)年に大湯に移り住む。商業や鉱山業など行う。浅井末吉や諏訪富多らと親交を深め短歌や俳句に親しみ、大湯郷土研究会の発足にも参加した。『花海日記』によると人形の素材の朴木の入手と頒布を行っていた。
- 注 9 中村次郎：『鹿角市史第Ⅲ卷（下）』によると、中村次郎は鹿角郡小坂町に居住し、自然社（どのような団体か不明。しばしば、鹿角時報に辛口の投稿を寄せている）を設立した。昭和 6 年に秋田県会議員に立候補している。大正 15 年 11 月に発会した「鹿角国の華会」に浅井末吉とともに参加している。
- 注 10 木村善吉：江坂輝彌「藤株遺跡と木村善吉」（『秋田考古学第 18 号』昭和 36 年刊に収録）によると、昭和の初め頃に秋田市にあった保険会社の支店に勤務していた。

考古学の熱心な研究者で『史前学会』や『東京人類学会』に入会していた時もある。昭和2年～4年の『秋田魁新報』に「江見水蔭先生の『太古の日本』を読む」と言った投稿記事がある。昭和5年に浅井末吉や諏訪綱俊の協力を得て菩提野遺跡を発掘調査し、同年の『人類学雑誌第45号第9巻』に「陸中大湯町堅穴調査報告」を発表している。北秋田市(旧鷹巣町)藤株遺跡や石倉岱遺跡の調査にも係っている。國學院大學博物館に木村氏が寄贈した石倉岱遺跡の出土品がある。

昭和3年の『秋田魁新報』にアイヌに関する投稿記事もある。

- 注 11 『遺蹟巡礼日記』**：昭和5年～6年に大湯村(町)周辺の遺蹟踏査した時の日記。大湯環状列石の発見の経緯や「中通台地」に終末期古墳が存在することが記録されている。諏訪富多は浅井や花海の日記をもとに『大湯環状列石発掘史全編』を書き起こしている。
- 注 12 川村女学院**：現在の川村学園女子大学。創始者は川村文子(旧姓 武田フミコ。出生地は秋田県藤里村)。文子の夫は犬養毅内閣の司法大臣を務めた川村竹治(出生地は旧秋田県鹿角郡花輪町横町。本館向い)である。
- 注 13 昭和初期の家族構成**：昭和初期の家族構成について不明であるが、昭和30年頃の花輪通りの商家の家族構成は多人数であったと記憶している。筆者が記憶している商家では家主を筆頭に数人の息子達が店の経営に当たっていた。そのため家主夫婦・息子夫婦とその子供達の10人程が一つ屋根の下に暮らしていた。恐らく近郊農家でも、所有・借地する農地や畑地を耕作するため商家と同じように大家族で暮らしていたものと思われる。
- 注 14** 記事の中に妃殿下のほか、秋田県知事・武部六蔵の名前が見える。妃殿下は昭和5年9月16日に来県。武部知事の就任期間は昭和7年6月28日から同10年1月15日であり時間的な相違が生じているが、本書では新聞記事の年月日を採用した。
- 注 15** 小笠原光の「生誕100年 知られざる勝平得之-故郷をみつめる新しい眼」に木村五郎から得之に宛てた手紙が引用されており、得之の技術の高さを「あなたの如き優秀作者が継続されなくては困ると思ひ手紙を書こうと思っていました」とある。この論文は秋田県立近代美術館の展示図録に収録されている。
- 注 16 杉村楚人冠**：明治36(1903)年に朝日新聞社に入社。卓抜な文章を書くことで知られ、社内に調査部や記事審査部を創設した。「朝日グラフ」の創刊者で、随筆家でもあった。昭和8年、宮川村(現在の鹿角市八幡平の一部)の村長を会長とする八幡平頭勝会が組織された。翌年、国立公園関係者を招き八幡平登山を計画し、その中に楚人冠がいた。彼は八幡平登山の途中で落馬して右腕を骨折した。落馬後、「永田のセガリ(今の整骨師)」の手当てを受け、療養のためしばらく湯瀬温泉に滞在している。この事故が全国に報道され、さらに杉村執筆の八幡平の紹介文と写真が『アサヒグラフ』に八回連続で掲載されたことにより、八幡平と湯瀬温泉が一躍有名となった。また、湯瀬ホテルの関直右衛門が静養先となった縁で「落馬記念碑」を建立し、この出来事が新聞等で報道されている。

《引用・参考文献》

- 文献 1 東京文化財研究所 『東文研アーカイブデータベース』 「山本鼎」
- 文献 2 山口真理、三橋俊雄、宮崎清 『デザイン学研究 42-2』
「山本鼎の日本農民美術運動」 1995年5月
- 文献 3 斉藤長八 『上津野 No.22』
「没後五十年を迎えて 浅井小魚の鹿角の文化に果たした役割」 平成9年
- 文献 4 花海清人 『花海日記 昭和三年八月二二日～十月二一日』
- 文献 5 花海清人 『花海日記 昭和三年十月二三日～一二月二十日』
- 文献 6 花海清人 『花海日記 昭和三年十一月七日～昭和四年二月二十日』
- 文献 7 花海清人 『花海日記 昭和四年十二月六日～昭和五年一月二八日』
- 文献 8 花海清人 『花海日記 昭和五年一月二九日～四月二八日』
- 文献 9 花海清人 『花海日記 昭和五年二月三日～三月五日、十一月一日～十一月五日』
- 文献 10 花海清人 『花海日記 昭和五年四月三十日～六月二十日』
- 文献 11 花海清人 『花海日記 昭和五年九月二日～十一月十一日』
- 文献 12 長野県小縣郡神川村訓練所 『日本農民美術 第一年展覧会』
「五月廿八日・廿九日・三十日の三日間 三越呉服店本館五階に於て」 1920年
- 文献 13 上田市山本鼎記念館 『山本鼎記念館閉館特別展 ありがとう 山本鼎記念館』
上田市山本鼎記念館 平成26年2月6日
- 文献 14 宮川泰夫 『比較社会文化 11』
「農美運動と民芸運動：風土文化の深化と産業地域の改革」 2005年2月
- 文献 15 東京文化財研究所 『東文研アーカイブデータベース』 「木村五郎」
- 文献 16 秋田魁新報社 『秋田魁新報』 昭和8年4月1日
「秋田風俗木彫展 木村五郎氏作品」
- 文献 17 川村薫編集 『鹿角時報』 昭和3年4月10日 「大湯通信」
- 文献 18 川村薫編集 『鹿角時報』 昭和3年8月30日
「大湯土俗製産組合 木ぼり講習会終る」
- 文献 19 木村五郎研究会編・刊 『童心の彫刻家 木村五郎資料集 I』 平成11年8月
- 文献 20 川村薫編集 『鹿角時報』 昭和3年2月10日 「大湯村農会で支会役員会」
- 文献 21 秋田魁新報社 『秋田魁新報』 昭和3年5月2日
「十和田土産 木彫と石膏細工 日本農民美術研究所の指導を受けて」
- 文献 22 秋田魁新報社 『秋田魁新報』 昭和3年6月21日
「木彫り人形 講習会を開く 大湯村にて」
- 文献 23 川村薫編集 『鹿角時報』 昭和3年6月25日
「愈々確定した大湯村の風俗人形木彫講習」
- 文献 24 秋田魁新報社 『秋田魁新報』 昭和3年7月25日
「十和田土産の製作講習会」
- 文献 25 秋田魁新報社 『秋田魁新報』 昭和3年9月29日
「十和田のみやげ 大湯彫人形 大湯町制を機会に一斉に宣伝販売」

- 文献 26 川村薫編集 『鹿角時報』昭和3年11月1日
「木彫秋田風俗人形 農民美術 十和田土産として好評」
「大湯の名物」
- 文献 27 秋田魁新報社 『秋田魁新報』昭和3年11月1日 「大湯土産土俗人形」
- 文献 28 川村薫編集 『鹿角時報』昭和4年12月5日
「一等賞得た 大湯木彫人形 全国共進会で」
- 文献 29 「農芸展出品 五百点」 発行者、新聞名、発行日は不明。
- 文献 30 「農民美術品入選決定 富民協会主催展覧会」 発行者・新聞名・発行日不明。
- 文献 31 「お手並が素晴らしい 全国農民芸術品展覧会 山本審査員の各府県別評」
発行者・新聞名・発行日不明。
- 文献 32 仙台鉄道局著 『東北の玩具』 昭和12年 日本旅行協会発行
- 文献 33 秋田魁新報社 『秋田魁新報』昭和4年1月16日
「大湯人形歓迎さる 東京、京都方面に於て」
- 文献 34 川村薫編集 『鹿角時報』昭和4年1月20日
「大湯木彫人形も農閑期を利用して」
- 文献 35 秋田魁新報社 『秋田魁新報』昭和6年3月12日
「大湯人形に新しい趣向 鉾山国風俗を」
- 文献 36 秋田魁新報社 『秋田魁新報』昭和3年12月7日
「土俗人形個展 浅井小魚氏作」
- 文献 37 秋田魁新報社 『秋田魁新報』昭和6年8月11日
「献上版画選定 勝平氏の光栄」
- 文献 38 秋田魁新報社 『秋田魁新報』昭和6年8月22日
「御土産として風俗人形御買上 照宮さま孝宮さまへ」
- 文献 39 川村薫編集 『鹿角時報』昭和9年2月21日 「大湯から大阪へ出品」
- 文献 40 東京文化財研究所 『東文研アーカイブデータベース』「勝平得之」
- 文献 41 勝平得之 『秋田魁新報』昭和3年12月25日
「農民美術 大湯人形について」 秋田魁新報社
- 文献 42 秋田魁新報社 『秋田魁新報』昭和5年9月2日
「農民美術講習会 田沢湖畔にて」
- 文献 43 中村次郎 『鹿角時報』昭和3年11月10日
「大湯十和田の精神文明 土俗生産奥の院今如何？」 川村薫編集
- 文献 44 秋田魁新報社 『秋田さきがけ』昭和3年12月5日 「人形組合の内証」
- 文献 45 勝平得之 『秋田魁新報』昭和12年4月16日
「郷土玩具 (十四) 大湯人形」
- 文献 46 川村薫編集 『鹿角時報』昭和7年6月15日
「新緑の十和田湖 遊観団体続々訪れ 大湯温泉も賑ふ」
- 文献 47 「やがて大湯の名物の土俗 サンプル四種」 秋田魁新報社発行の『秋田魁新報』、昭和3年8月～9月に発行されたものと推定される。

- 文献 48 「勝平得之氏の木彫風俗人形」
秋田魁新報社発行の『秋田魁新報』と推定される。発行日は不明。
- 文献 49 岸田恵理 『長野県立歴史館研究紀要 第15号』
「彫刻の風景 -松本白樺工芸の山付登山人形について-」
長野県立歴史館 2009年3月
- 文献 50 鹿角市 『鹿角市史 第Ⅲ巻(下)』 鹿角市 平成5年11月
- 文献 51 秋田魁新報社 『秋田魁新報』 昭和9年7月15日
「杉村楚人冠氏 八幡平で落馬 左腕の骨を折る」
- 文献 52 齊藤長八 『大湯ふるさと探訪』「三、大湯の物産」 大湯郷土研究会 1998年
- 文献 53 太田和夫 『秋田県立博物館研究報告 No.2』
「木版画家勝平得之 作品と其人」 1977年
- 文献 54 勝平新一 『勝平得之全作品集(没後20周年記念制作)』
秋田文化出版株式会社 1991年1月
- 文献 55 山口畑一 『竹とんぼ 第30号』「農民美術運動と東北の郷土玩具」
丹野寅之助著「東北郷土玩具研究」の考察
日本郷土玩具の会 平成23年8月
- 文献 56 木村五郎 『木彫作程』 昭和8年9月 金星社
- 文献 57 原田 治 『ぼくのみ術ノート』「木彫り人形と農民美術運動」
40p~43p 株式会社亜紀書房 2017年
- 文献 58 土田杏村 『長野県文学全集 3』「農民美術研究所について」
郷土出版社 平成元年11月18日
- 文献 59 山本鼎 『編年体 大正文学全集 第九巻 大正九年 1920』
「農民美術と私」 ゆまに書房 2001年12月10日
- 文献 60 藤井虎雄 『しま No.182』「木を刻む 木村五郎 大島農民美術資料館のこと」
財団法人日本離島センター 平成12年8月
- 文献 61 秋田県立博物館 『秋田県立博物館研究報告 No.3』
「展示報告 地域展「伝説のさと鹿角」 1978年
- 文献 62 歴史学研究会・日本史研究会編集 『日本歴史 9 近代3』
「農民美術運動」 265p~266p 東京大学出版社 1985年7月
- 文献 63 千田敬一 『これは彫刻になっております -木村五郎の彫刻とその生涯-』
星雲社 2005年6月
- 文献 64 秋田県立博物館 『展示報告 勝平得之の作品と秋田』
秋田県立博物館 昭和52年3月
- 文献 65 藤本智士 「秋田の版画家 勝平得之が得たもの」『のんびり 14』
発行：秋田県 編集：のんびり合同会社 2015年
- 文献 66 愛馬信太郎 『勝平得之物語 雪国の風俗版画家の人と作品』 1977年1月
- 文献 67 井上房子・達平新一 『勝平得之作品集 版画[秋田の四季]』
秋田文化出版株式会社 平成13年8月

- 文献 68 勝平新一 『勝平得之全作品集』 秋田文化出版株式会社 1992年1月
- 文献 69 勝平新一 『生誕百年記念刊 勝平得之〔画文集〕』
秋田文化出版社株式会社 平成16年
- 文献 70 秋田魁新報社 『秋田魁新報』 昭和3年9月8日
「大湯の郷土芸術的土産品として・・・」
- 文献 71 秋田魁新報社 『秋田魁新報』 昭和5年3月10日
「大湯農民美術講習終了式あぐ」
- 文献 72 秋田魁新報社 『秋田魁新報』 昭和4年3月3日
「勝平得之氏の木彫り人形」
- 文献 73 秋田魁新報社 『秋田魁新報』 昭和4年3月3日
「勝平得之氏の木彫り人形」
- 文献 74 秋田魁新報社 『秋田魁新報』 昭和5年5月19日 「出品の人形」
- 文献 75 「風俗人形好評 勝平氏の木彫」
秋田魁新報社発行の『秋田魁新報』と推定される。発行日は不明。
- 文献 76 「勝平氏入選す」
秋田魁新報社発行の『秋田魁新報』と推定される。発行日は不明。
- 文献 77 「農民芸術展覧会 廿三日受賞者決定」
発行者、新聞名、発行日は不明。
- 文献 78 「都会人を慰めた 秋田人形 大阪農民芸術展で 好評を博す」
発行者、新聞名、発行日は不明。
- 文献 79 「市特産品批判会 市議事堂で挙行」
秋田魁新報社発行の『秋田魁新報』と推定される。発行日は不明。
- 文献 80 秋田魁新報社 『秋田魁新報』 昭和6年5月12日 「農芸展入選」
- 文献 81 「こりアたいして物と 町田農相が賞賛 東京で農芸展大人気」
秋田魁新報社発行の『秋田魁新報』と推定される。発行日は不明。
- 文献 82 秋田魁新報社 『秋田魁新報』 昭和6年2月25日
「勝平氏作品入選」
- 文献 83 秋田魁新報社 『秋田魁新報』 昭和6年8月11日
「献上版画選定 勝平氏の光栄」
- 文献 84 秋田魁新報社 『秋田魁新報』 昭和8年11月6日
「大湯名産 根曲竹細工 営林署肩を入れる」
- 文献 85 秋田魁新報社 『秋田魁新報』 昭和5年5月5日
「本県出品の入選 非常の好成績」
- 文献 86 「御献上特産品 東伏見宮大妃殿下御成りに当り・・・」
秋田魁新報社発行の『秋田魁新報』、発行日は昭和5年9月中旬と推定される。
- 文献 87 「献上品 御来県の際東伏見宮大妃殿下に対し・・・」
発行者は秋田魁新報社、新聞名は『秋田魁新報』と推定される。発行日は不明。

本館発行資料のご案内

- 『鹿角市歴史民俗資料館調査資料 1』
「鹿角の家庭・郷土料理 けの汁・けいらん」 平成 31 年 2 月 9 日
- 『鹿角市歴史民俗資料館調査資料 2』
「鹿角の土人形」 令和 2 年 3 月 31 日
- 『鹿角市歴史民俗資料館調査資料 3』
「大湯木彫人形」 令和 3 年 2 月 28 日

これらの資料は、本館ホームページで閲覧できるほか、プリントアウトも可能です。
参考・引用文献として使用するときには下記の注意事項をお守りください。

< 注意事項 >

- ※ 参考文献等に本書を使用した時は、出典を必ず明記してください。
- ※ 本文に引用した文章は「孫引き」せずに、必ず原本を確認してください。
- ※ 本書並びに本館ホームページに掲載した写真は、所蔵者から許可を得て掲載しました。本書並びにホームページから写真を引用・転載することを禁じます。

鹿角市歴史民俗資料館調査資料 3

『大湯木彫人形』

発行者 鹿角市歴史民俗資料館
(指定管理者 太平ビルサービス株式会社秋田支店)
発行日 令和 3 年 2 月 28 日
住 所 〒018-5201 秋田県鹿角市花輪字中花輪 113 番地
電話・FAX 0186-22-7288